「絵図・地図からみる竹島（II）」

島根大学法文学部・歴史地理学　舩杉力修

はじめに

本報告は、先の中間報告書「絵図・地図からみる竹島―韓国側の史料を事例として―」に続くものである。中間報告書では、韓国側の絵図・地図を事例として、韓国側では、絵図・地図上では、現在の竹島の位置を正確に把握しておらず、現在の竹島を朝鮮領としても認識していなかったことを明らかにした。したがって文献上でみられる、1696年の安龍福の証言、そして1728年の『粛宗実録』に于山島が日本の松島にあたり、于山島はともに朝鮮領であるといった記載についても、史料を再検討する必要があるとした。その後の研究調査で、韓国側の史料では、前回の中間報告書執筆の時点では確認できなかった史料を新たに検討することができた。また絵図、地図を検討する際には、西欧作製の地図、日本側作製の絵図、地図も悉皆的に検討しなければならない。２年という短い期間では、膨大な量にのぼるこれらの絵図、地図については悉皆的に押さえることができなかったものの、西欧図はある程度概要をつかむことができた。日本図は従来の研究で取り上げられなかった地図を中心に検討し、本報告では予察的な考察を行なった。さらに2006年11月には竹島問題で重要な場所である韓国・鬱陵島で現地調査を実施し、絵図、地図に記載された内容について、現地で検討することができた。本報告では、韓国、西欧、日本の絵図、地図の検討結果について述べ、さらに韓国・鬱陵島での現地調査の報告を取り上げる。そうした検討から、韓国、西欧、日本では、現在の竹島を地理的にどのように認識していたかについて、歴史地理学の立場から考察することとしたい。

絵図の考察の際に重要となるのは、絵図は作製された時代の地理的認識を示すという視点である。従来の研究では絵図、古地図はその記載の不正確さから、研究が重要視されていないことがあった。不正確かどうかを重要視するのは、絵図を、現代の価値観をもって分析する視点であるといえる。検討の際には、現代の地図に比べて不正確かは重要ではない。絵図の作製過程や作製の背景を分析することは当然のこと、それだけでなく、絵図の分析を通して、絵図の作製された時代の空間認識、価値観を読み取ることことが重要であるといえる。

１．韓国側作製の絵図の分析

１）はじめに

先の中間報告書では、韓国国内に所蔵される朝鮮王朝時代を中心にした絵図を、系統的に収録した李燦氏の『韓国の古地図』を中心に60点の絵図を検討した。その後、2006年に韓国・国立中央博物館が独島（竹島）に関する特別展を実施し、あわせて絵図や文献を収録した図録『行ってみたい我が領土、独島』を刊行するなど、新たに絵図を確認・検討することができた。先の中間報告書に加え、韓国が現在の竹島と主張する于山島と、鬱陵島を記載する絵図、地図の一覧表を作成した【別表１】。この表は中間報告書の表をもとにして、図録『行ってみたい我が領土、独島』をベースに、韓国・ソウル大学校奎章閣のホームページ、韓国で絵図を中心に竹島研究を精力的に行なっている Gerry Bevers 氏のホームページ[1)]、そして日本、韓国で個人的に竹島に関する絵図、地図の分析し、その成果をホームページで掲載しているものも適宜参考とした[2)]。その結果、点数は86点にも及んだ。本報告では中間報告書に追加する形で、86点の絵図、地図のうち、特に注目される1682年頃作製の『東輿備攷』に収録された「江原道東西州郡総図」のうち鬱陵島を描いた「蔚珍県図」と、鬱陵島を詳細に描いた絵図があわせて16点確認されたので、その「鬱陵島図」について検討する。

2）『東輿備攷』所収「江原道東西州郡総図ー蔚珍県図」について

『東輿備攷』は、1682年頃の作製とされ、釋圓眞所蔵本を1998年に慶北大学校出版部が影印版を出版している。慶北大学校出版部のホームページに、解題の一部が掲載されている[3)]。それによると、構成は32種類の地図を収録した地図集で、咸鏡道から済州島までの朝鮮全国を包括し、日本の行基図（倭国八道六十六州之図）まで含んだとても精密で体系的な地図集である。前半部分は歴史地図で、三韓時代から三国時代、高麗時代までの領土と地域別に統治単位を示している。後半は道別地図、郡県地図となっており、そのほか都城地図、済州島、平壌などの地図も収録されている。歴史的な地名、各地域の特色、城郭及び軍事要衝地などの表記が詳細であるのも特徴である。朝鮮時代初期に作製された『東覧図』よりは詳しいものの、朝鮮時代後期に作製された道別地図、郡県地図とは違っており、道別地図と郡県地図を複合して作製した複合郡県地図であるのも特徴であるとしている。

鬱陵島が描かれているのは、「江原道東西州郡総図」のうち「蔚珍県図」である【図1-1】。Gerry Bevers氏によれば、この地図について以下のように記している。「この地図には蔚珍の沖に２つの島があることが確認出来ます。鬱陵島と武陵島です。武陵島の横に「一云于山」と書かれていますが、「于山島」とも呼ばれていたという意味です。上掲の絵図はとても興味深いものです。というのも、鬱陵島と武陵島と于山島の名称が全て一つの地図に記載されているからです。これらの島々の古い地図はたいてい、鬱陵島と于山島、もしくは武陵島と于山島のどちらかが載っていますが、三つの名前が同時に載ることが無かったからです。于山島の方がよく使用されている名称でしたので、武陵島は鬱陵島の別名だと考えられていました。しかし、上掲の地図で、武陵島も于山島の別名として使用されているのを初めて見ました。このことは于山島が「独島」でないことの更なる証拠となりえます。というのも、名称の混乱が起

図1-1　『東輿備攷』所収「江原道東西州郡総図・蔚珍県図」（鬱陵島周辺）

こるほど鬱陵島と于山島が近かったということを示しているからです。」上記の指摘は重要である。韓国側は、従来鬱陵島は武陵島とも呼ばれ、于山島は現在の独島であるとしていたが、この絵図では于山島が武陵島とも呼ばれていたことを示している。実際鬱陵島の西側にはこうした島が存在していないことからも、当時朝鮮では、鬱陵島、武陵島、于山島が位置、名称とも地理的に混乱していることを示しているのである。

さらに注目されるのが、この地図集の名称についてである。慶北大学校出版部の解説によれば、『東輿備攷』という表題は、竹島問題でも有名な地誌『東国輿地勝覧』（1481年成立）からとったとされるという点である。「東輿」は「東国」と「輿地勝覧」の頭文字をとり、「備攷」という名称は『東国輿地勝覧』を利用するのに参考となる地図という意味であるとされる。『東国輿地勝覧』は後に改訂を重ね、1531年に『新増東国輿地勝覧』として増補された。つまり、『東輿備攷』は、『東国輿地勝覧』（15世紀末期から16世紀前期）をもとに、17世紀後期の朝鮮半島における地理的認識を示した史料ということとなる。『新増東国輿地勝覧』には、「蔚珍縣」に「于山島、欝陵島。一に武陵と云う。一に羽陵と云う。二島は縣の正東の海中に在り。三峯岌業として空を撑え、南峯やや卑し。風日清明なれば即ち峯頭の樹木及び山根沙渚歴歴見るべし。」と書かれている。下條座長の分析（2005、pp.151-152）によれば、地誌の編纂には編輯方針となる「規式」が存在し、島嶼の場合には、陸地からの距離を明記する原則があったとされる。つまり、『新増東国輿地勝覧』の場合には、陸地である朝鮮半島の蔚珍から于山島、欝陵島があり、蔚珍から島が見えるということとなる。実際には、蔚珍と鬱陵島の間には島はないので、『新増東国輿地勝覧』に記される後半の島の記載内容は鬱陵島のこととなる。

『新増東国輿地勝覧』所収の絵図（「東覧図」）のうち「八道総図」では、于山島・鬱陵島の二島を描いており、于山島を西側、鬱陵島を東側に描いている。地誌編纂の方針、陸地からの距離を明記するという原則を考えると、『新増東国輿地勝覧』では、「于山島、欝陵島」の順で記載されていることから、「八道総図」では、原文の表記通り、朝鮮半島から東へ于山島、鬱陵島の順に記されたこととなる。『東輿備攷』が『東国輿地勝覧』の参考地図として作製したとすれば、『新増東国輿地勝覧』の記載が、于山島、欝陵島の順、別名は武陵島、羽陵島の順に記されていることから、絵図においても陸地からの東へ至る順番、于山島（武陵島）、欝陵島の順、絵図も記載されているとみることができる。

つまり、絵図も地誌もこの時期に島々を実際に踏査したわけではなく、それ以前の地誌『世宗実録地理志』[4]（1454年成立）や現在の鬱陵島の踏査結果を記したとみられる『太宗実録』、『世宗実録』などをまとめ直したに過ぎないのである。このように、絵図、地誌の分析から、当時朝鮮王朝は朝鮮半島の東側に于山島と鬱陵島の二島を認識していたというよりは、鬱陵島、武陵島、于山島を混乱して認識していたことが読み取れる。史料の記載内容からもこれらの島は鬱陵島のことを記していたに過ぎなかった。

韓国側の一部の指摘で、「于山島と鬱陵島は一つの島を混同したのではなく、東海の中にある二つの島で表記したことを示す」、「『東輿備攷』に表記された武陵島と鬱陵島のうち、武陵島は太宗・世宗・成宗の三朝で 1511年（中宗６）まで朝鮮で使った公式地名で、再三役人を派遣し調査していた。この時の朝鮮の記録をみれば、武陵島を人が住む島として記述しており、鬱陵島には言及がなかった。こうしたことが『東輿備攷』に表記された武陵島が現在の鬱陵島で、鬱陵島が現在の独島という明確な物証である」[5]などとした意見がみられる。しかしながら、役人が派遣された記録をみても、武陵島、于山島、茂陵島、三峰島など様々な名称が記載されるものの、これは記載内容から当時の鬱陵島とみられることから、武陵島は朝鮮王朝の公式地名であるとか、鬱陵島という名称に言及がないので、絵図に記される鬱陵島は現在の独島であるという指摘は全く根拠がないといえる。こうした主張は朝鮮半島の東側には鬱陵島と独島があるという現在の空間認識を前提とした議論であるといえる。

3）各種の「鬱陵島図」について

先の中間報告書では、鬱陵島を詳細に描いた絵図として、『韓国の古地図』に収録された、18世紀中期作製の地図帳『海東地図』所収「鬱陵島図」を取り上げた。それによれば、地形や河川、船の停泊場所、集落跡、石碑、墓地、竹田の分布などが記されていること、島の東には「刻石立標　倭船倉可居」といった記載があり、かつて日本人がこの島に来島し、倉を建てるなど経済的活動をしていたこと、絵図の上部には、鬱陵島の様々な産物を記していることなどから、島を実際に踏査して作製したと考えられることを述べた。さらに、この絵図には鬱陵島東のすぐ脇の島に、「所謂于山島」と記していることから、この島は鬱陵島の属島である、現在の竹嶼（韓国名竹島）にあたると考えられ、実際の調査をふまえ、この時期にようやく「于山島」の位置が比定されたとした。この絵図は、韓国側の主張である「于山島」が現在の独島であるという主張を覆すという点で、重要な史料であるといえる。その後、2006年に韓国・国立中央博物館が発行した図録『行ってみたい我が領土、独島』などで多数の独島にかかわる絵図が収録され、中間報告書執筆の時点で確認することができなかった絵図を新たに検討することができた【別表１】。ここでは、図録『行ってみたい我が領土、独島』をベースとして、韓国・ソウル大学校奎章閣のホームページなどで確認することができた「鬱陵島図」16点について検討することとしたい。

①『鬱陵島図形』ソウル大学校奎章閣所蔵（奎12166）【図1-2】

ソウル大学校奎章閣の解説によれば、以下のように記されている。「墨筆で描いた鬱陵島の写形図。東西と南北の距離が表されている。周辺に 乾、坤、艮、巽の方角が記される。沿岸４ヶ所には「舡舶待風所、民人可居処」と書かれている。絵図の下端には「海長竹田所謂于山島」と記された小さな島が書かれている。この「于山島」と記された島が独島を指すようである。絵図には墨版白書で「辛卯五月十四

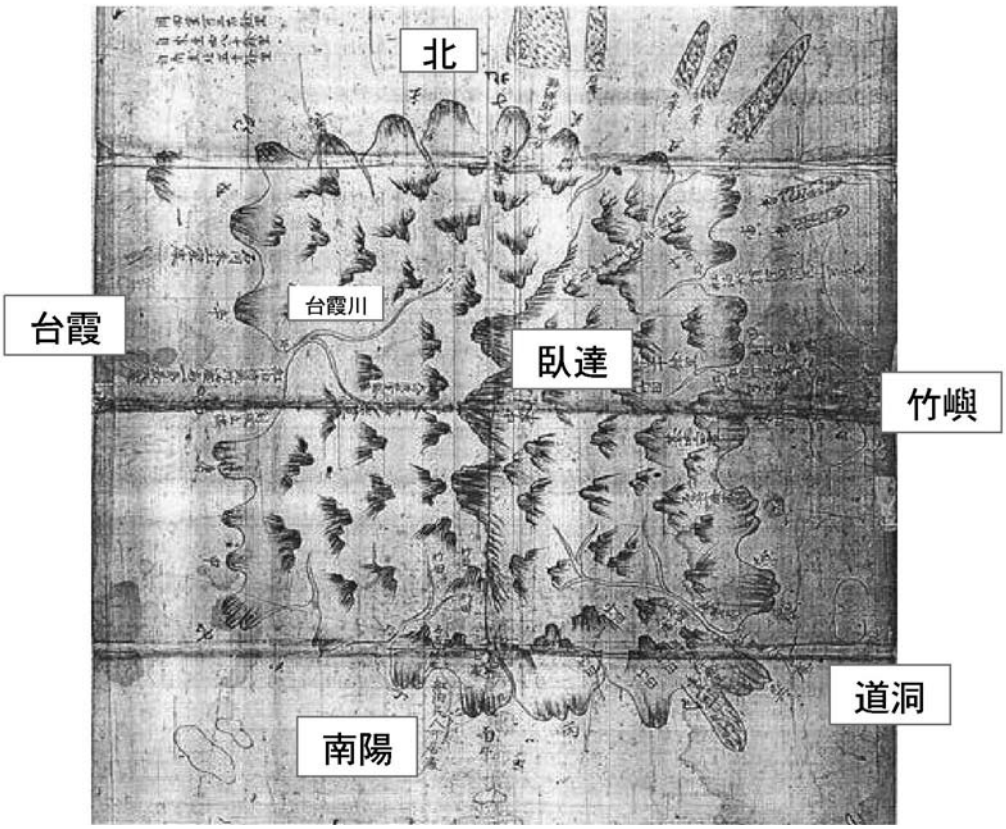

図1-2　『鬱陵島図形』（ソウル大学校奎章閣所蔵）の現地比定

北

図1-3　『鬱陵島図形』(「于山島」周辺を拡大)
島には、「海長竹田」「所謂于山島」と記されている

日自倭舡倉移舟待風所 拙書一句以標日後 (刻立卯岩木於方上) 万里滄溟外将軍駕桂舟平生伏忠信履険自無漫、捜討官折衝将軍三陟営将兼水軍僉節制使朴昌錫、軍官折衝朴省三、金寿元、倭学朴命逸」と記されている。地図の裏には「営将朴昌錫所作 鬱陵島地図」と記載している。「朴昌錫、朴省三、金寿元」などの名前がみられるがこれらがいつの人物なのか分からない。また「辛卯」の年代も未詳である。「備辺司」印があり、製作者が営将であった朴昌錫であることから、これは軍事的な目的で作製されたことが分かる」としている。つまり、鬱陵島のすぐ東側に描かれた島は、「于山島」という記載から現在の独島であるとしている。

またこの絵図については、Gerry Bevers 氏がホームページで以下のように記している。「一つの島だけ名前がついています。その島は東の沖にあり、「所謂于山島、海長竹田」と標記されています。海藏竹(日本名は女竹？)は、高さが20フィート〈約6m9.6㎝〉、幅が1.5インチ(約3.8㎝)にもなる竹の種類です。学名は Pleioblastus simonii です。于山島の竹林は、地図上で唯一竹の種類が記載された場所です。ソウル大学奎章閣地図文献博物館は、地図の描かれた于山島が「独島」であろうと述べています。しかし、この地図の于山島は、鬱陵島の隣にある竹嶼と、鬱陵島の東海岸沖のほぼ全く同じ場所に位置しています。それに、この島は6mも伸びる竹林があると書かれていることも合わせて、ソウル大学は、大嘘つき、いえ、お間違えになっている、と思います。独島(Liancourt Rocks)は、そもそも不毛な2つの岩からなる島で、上記のような竹が生える土さえありません。地図に表された于山島はほぼ確実に、鬱陵島の北東沖約2.2㎞というすぐ隣にある竹嶼です。ちなみに、竹嶼は、竹島のことです」としている。Gerry Bevers 氏の指摘は重要である。この絵図は研究会でもすでに2006年11月の時点で下條座長から提供を受け、検討していた。「所謂于山島」という記載については確認していたものの、「海長竹田」の記載は判読できていなかった。

下條座長のご教示によれば、この絵図の作製年代は、絵図を作製した朴錫昌は「辛卯五月初九日、倭舡倉に到り、泊す」とする石碑を鬱陵島に残しており、その石碑の「辛卯」は、韓国・国立博物館が1963年に刊行した古蹟調査報告書で1711年としていることから、『鬱陵島図形』の「辛卯」は1711年であると

される。Gerry Bevers 氏の指摘の通り、「于山島」に記されている「海長竹」は「海蔵竹」で、日本では女竹にあたる。鬱陵島には単に「竹田」と記されているので、「于山島」にあった「海長竹」とは別の種類の竹である可能性がある。18世紀中期作製『海東地図』所収「鬱陵島図」には絵図の上部には、島の産物として「篁竹」が挙げられている。「篁竹」とは日本では真竹にあたる。現在の竹島には竹の生えるような島ではないことから、これは鬱陵島の東 2 ㎞に位置する竹嶼（韓国名竹島）であると考えられる。元禄 9 年（1696）作製推定の「小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図」（鳥取県立博物館所蔵8443号）にも現在の竹嶼にあたる「まの嶋」には竹林が絵で描かれていることから、ほぼ同時期に、日本、朝鮮ともに、現在の竹嶼（韓国名竹島）に竹林があったと認識していたことは注目される。

地形図をもとに『鬱陵島図形』の現地比定を行なった【図1-2】。島の西側に「舡泊待風所、此処一島最大処」とあるのは現在の台霞で、そこに注ぐ川の上流には、「大川流出」とあることから、この川は台霞川であると考えられる。島の南側「舡泊、民人可居処」とあるのは南陽、島の南東の「舡泊、民人可居処」は道洞であると考えられる。島の東、「舡泊所、倭舡倉、民人可居処」は「于山島」＝現在の竹嶼（韓国名竹島）の位置から、現在の臥達里と推定される[6]。島の北東部の石峯は、竹岩、三本岩の北東、「舡泊所所謂佇田洞、民人可居処」とあるのは、岩の位置から、三仙岩と観音島の間の海岸付近の集落「船倉」を指すと推定される。島の北側に位置する「穴岩」は、穴の開いている岩、孔岩であるとみられる。船が停泊し、また人が居住できるところ（「舡泊、民人可居処」）や、河川の河口付近に、「路」という文字があるのは、道であると考えられる。

その一方で、比定が困難な場所もある。島の南南東にある島は、道洞、苧洞の付近に比定されるので、北苧岩（北亭岩）の可能性がある。島の南部、島の南西部にはそれぞれ島が 2 ヶ所ずつ描かれているが、実際そのような島はない。ただ南部の通九味、南西部の南陽の付近には岩があり、1882年頃の「鬱陵島外図」でも大きな岩として描かれていることから、この岩である可能性もある。島の南南東、南、南西に描かれた 5 つの島（岩）は、後の絵図には「島」と描かれ、その数、位置も踏襲されている。そのほか、河川、船の停泊場所などの記載もほぼ踏襲されていることから、この絵図が後の絵図のもととなったと考えられる。このように、この絵図では、実際大部分現地と比定が可能であることから、港、河川、集落などを、ほぼ正確に描いた絵図であるといえる。ソウル大学校奎章閣の解説の通り、この絵図は営将朴錫昌の現地調査に基づき作製されたと考えられる。

②『輿地図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（古4709-68）【図1-4】

『輿地図』は作製年代不明であるが、18世紀中期の作製と推定されている。Gerry Bevers 氏は1730年としている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「『広輿図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）の鬱陵島地図と全体的な構図と内容がほとんど同じである。『海東地図』の鬱陵島地図も表現様式で一部差があるが、全体的な構図は似ている。註記には（鬱陵島の長さを）東西80里、南北50里と記しているが、地図では南北が少し長く描かれている。これは縦に長い四角形に合わせて、描く過程で発生した際にみられる。『海東地図』と比べて誤って筆写されたところもみられる。島の右側の下にある「基北三四処」の「北」は「地」に変えなければならない。もとの地図に記載される「基地」または「基趾」は過去に人々が居住した跡を意味するようであり、「石葬」は彼らの石墓を表すと考えられる。その他、船泊が停泊できる所、人々が居住できる所（「可居処」）、肅宗の時代、日本との領有権紛争後に朝鮮の領土という内容を刻んだようにみえる「立標」などが記録されている。右側にある「于山島」は多くの人によって現在の独島に認識されたりしているが、明らかではない。鬱陵島本島周辺の小さな島のなかで最大の観音島や竹島を示すこともあるからだ。註記には鬱陵島で出る特産物が詳らかに書かれている」とある。注目され

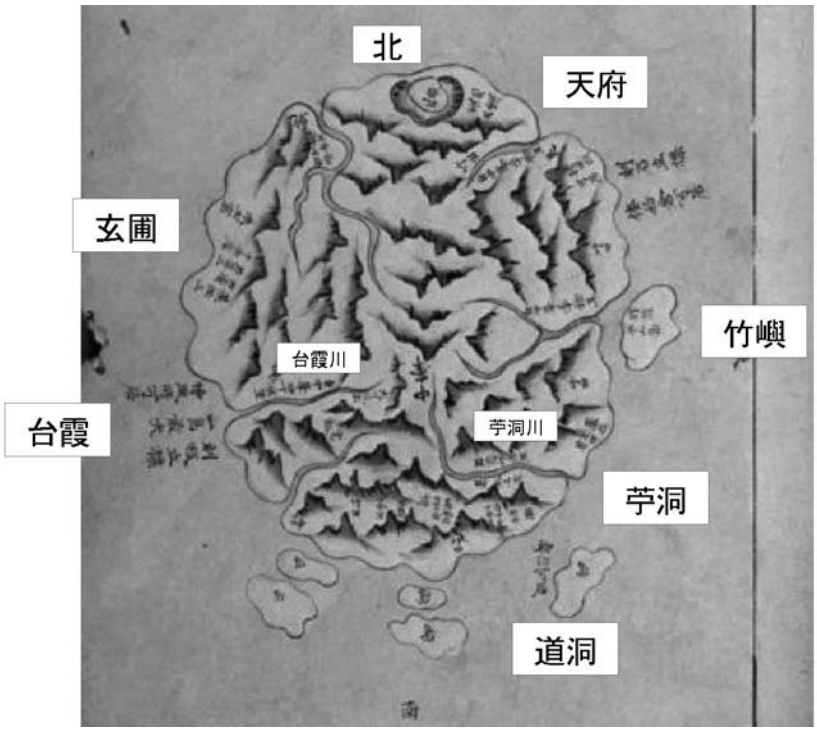

図1-4　『輿地図』所収「鬱陵島図」の現地比定

るのは、『鬱陵島図形』の解説では、「所謂于山島」は現在の独島であるとしていたが、この絵図では、独島という確証はなく、観音島か竹島（竹嶼）である可能性を指摘している。

『鬱陵島図形』と比べると、河川、港、集落など基本的な記載内容はかわらないものの、違いもみられる。島の北、北東に描かれていた岩がみられなくなる。後の絵図では、『海東地図』所収の「鬱陵島図」以外の絵図でも北、北東の岩がみられない。孔岩は、島の北端に描かれている。島の北東に位置する河川が長く描かれている。これは天府川で、河口は天府であるとみられる。また孔岩の西側にも河川が新たに長く描かれているが、これは平里川と推定され、河口は玄圃の東に位置する平里と推定される。島の北西部の現在玄圃に比定されるところには、「基地三四処、石葬二十余処」と新たに記している。その一方で、現在南陽に比定されるところには、船の停泊に関する記載がなくなっている。さらに島の南東部では、「船泊、可居」と書かれた地点は、『鬱陵島図形』より南となっていることから、これは現在の道洞と考えられる。その北側の河川、河口は苧洞川、苧洞であるとみられる。道洞、苧洞周辺では『鬱陵島図形』より記載が正確になったといえる。このように、『鬱陵島図形』に比べると、岩など記載がなくなるところもあるものの、河川、集落跡、石墓など、より記載が詳細になっている箇所があることから、1711年以後の調査により、絵図が補訂されたと考えられる。なお、註記にある鬱陵島の特産物や島の大きさの記載は、『海東地図』、『廣輿図』、『地乗』などと同じである。絵図の描き方、註記の内容などから、これらの絵図は、同系統の絵図であると推定される。

③『海東地図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（古大4709-41）【図1-5】

『海東地図』は18世紀中期（英祖 年間：1724―1776）の作製とされている。Gerry Bevers 氏は1750年代としている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「現在の慶尚北道鬱陵郡の鬱陵島と独島、周辺の島々を描いたものである。独島はこの地図で「于山島」と書かれている。鬱陵島のなかに中峰（聖人峯）を描き、周辺の峰全てが中心を向くように描いた独特の形式の地図である。東西南北とともに文王八卦

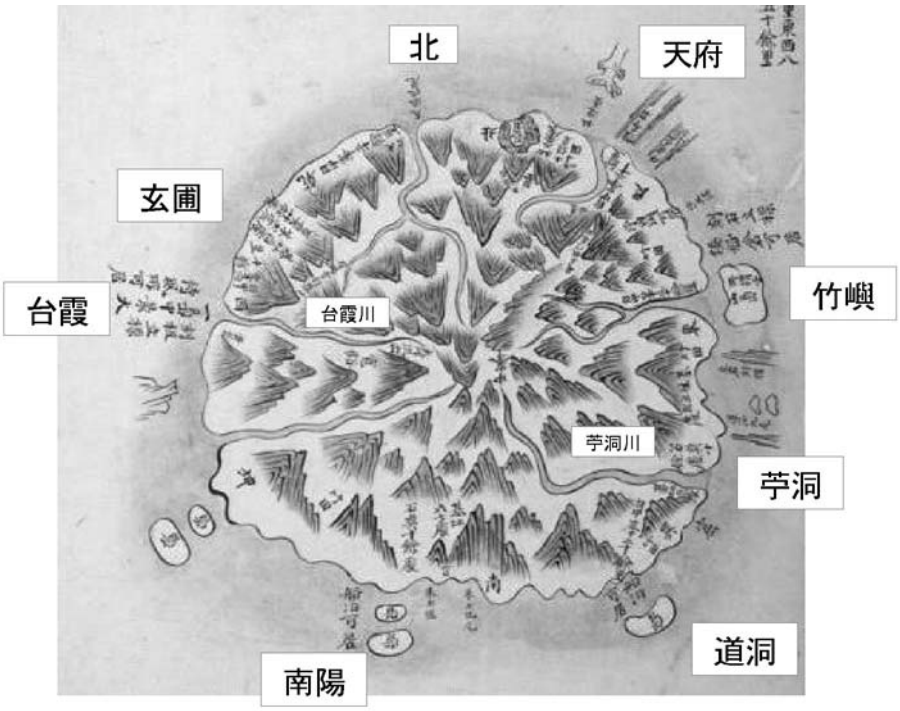

図1-5　『海東地図』所収「鬱陵島図」の現地比定

方位（巽・艮・乾・艮）によって方向を表示した。山なみの間に河川を描いて、「大川流出」と書いている。海岸では中峰までの距離を表示している。比較的広い地には「寛豁」と記している。住むことができる場所は「可居」と表した。海岸の岩には「立岩刻標」と記し、北の孔岩まで示している。「倭船倉」「待風」「船泊」「家居」など日本との関係、風、船舶運行、居住可能な地域なども表示されている。石城門の跡地、石葬(今も残っている鬱陵島の古墳)、塔、寺刹跡地などの遺跡を表している。海岸には竹田が多くの所に表されている。地図の余白は簡単に記録しているが、木、海産物、動物などが主な内容である」としている。

『輿地図』と鬱陵島の基本的な構図は同じであるものの、この解説では、「所謂于山島」は現在の独島であるとしている。台霞川の南側に描かれている河川は、南陽の位置から、亀岩川の可能性がある[7]。他の鬱陵島図と比べて記載内容が豊富である。島の北東部、東部、西部に岩が描かれている。北東部の岩は一本立島（竹岩)、三本立岩（一仙岩、二仙岩、三仙岩)、東部の岩は、北亭岩（北苧岩)、燈台岩であるとみられる。また北東の「苧田洞」の奥には「有石城門基址」、北西部の玄圃と比定される場所の奥には、「有塔寺刹基址」の記載がみられる。鬱陵島に石城門や塔・寺刹がかつてあったことが分かる。こうした記載は、他の絵図にはみられない。1711年の朴錫昌による踏査以後に、鬱陵島の現地調査が実施され、調査に基づき絵図が作製されたことを示していると考えられる。したがって、記載内容から「所謂于山島」は現在の独島ではなく、竹嶼（韓国名竹島）であることは明白である。

④『廣輿図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（古4790-58)【図1-6】

『廣輿図』は18世紀中期（英祖13―英祖52：1737―1776）の作製とされている。Gerry Bevers 氏は19世紀初期としている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「(略）地図右側には「倭船倉」があった所が表されていて、日本人漁夫が島に出入りしたことが分かる。地図左側の「刻板立標」と右側の「刻石立標」は日本との領有権紛争後、朝鮮の領土という内容を刻んだとみられる。地図下側に「船泊可居」

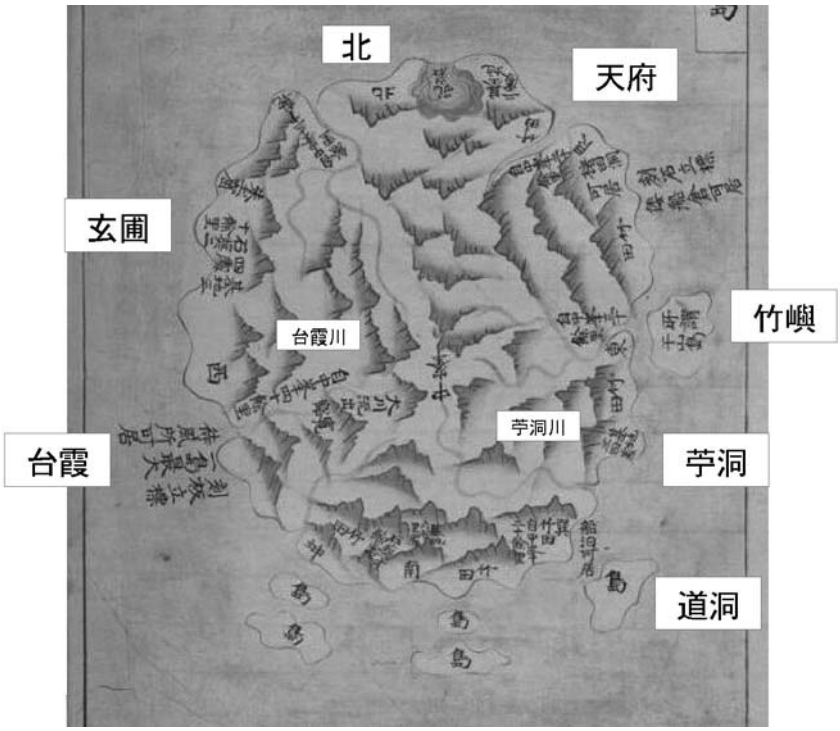

図1-6　『廣輿図』所収「鬱陵島図」の現地比定

と表示されたところは、現在鬱陵島郡庁所在地である道洞周辺とみられる。あちこちに昔の人々が住んだ所を示すとみられる「基地」が記されているし、石墓と思われる「石葬」も記されている。そして緯度が高いにもかかわらず、海の影響を受けて暖帯性植物が生育していることが分かる「竹田」が表されている。その他、坤・巽・艮・乾などはそれぞれ西南・南東・東北・西北を示す用語である」としている。

②の『輿地図』の解説にあるように、『輿地図』と全体的な構図がほとんど同じである。②と同様に、島の南側の島５つが、①の「鬱陵島図形」や③の『海東地図』と比べてかなり誇張して描かれていることが分かる。「所謂于山島」についての記載はないが、位置から現在の独島ではなく、竹嶼（韓国名竹島）である。

⑤『地乗』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（奎15423）【図1-7】

『地乗』は18世紀中後期の作製とされている。朝鮮後期に成立した全国各道郡県の地図と地方の形勢を収録した地理書である。Gerry Bevers 氏は1776年以後としている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「東海（日本海）上の鬱陵島を描いた絵画式地図のなかの一つである。地図が製作された当時鬱陵島は江原道郡県で２、３年間隔で捜討を実施したため、江原道の管轄に属していた。今は慶尚北道鬱陵郡にあたる。当時に郡県が設置されていなかったにもかかわらず、郡県地図帳に一枚一枚収録されたのは、鬱陵島に対する地理的な知識が多く流入したこと、東海（日本海）を中心に領土意識が高くなったことを表している。1711年朴昌錫が捜討後に製作した『鬱陵島図形』には、「中峰」が唯一の地名で記載されたが、この地図ではそれ以外の地名が追加して記載されている。これは捜討を通じて地理的な知識が持続的に補完されたことを示している。２つの地図の構図は似たり寄ったりである。中央に中峰（現在聖人峯）を配置し、山地は独立した峰の形態で描いている。方眼式地図では、（山地を）筋として表現しているとと対比される。中峰を源流として海へ流れる河川は６ヶ所描かれ、その形態も方眼式の郡県地図

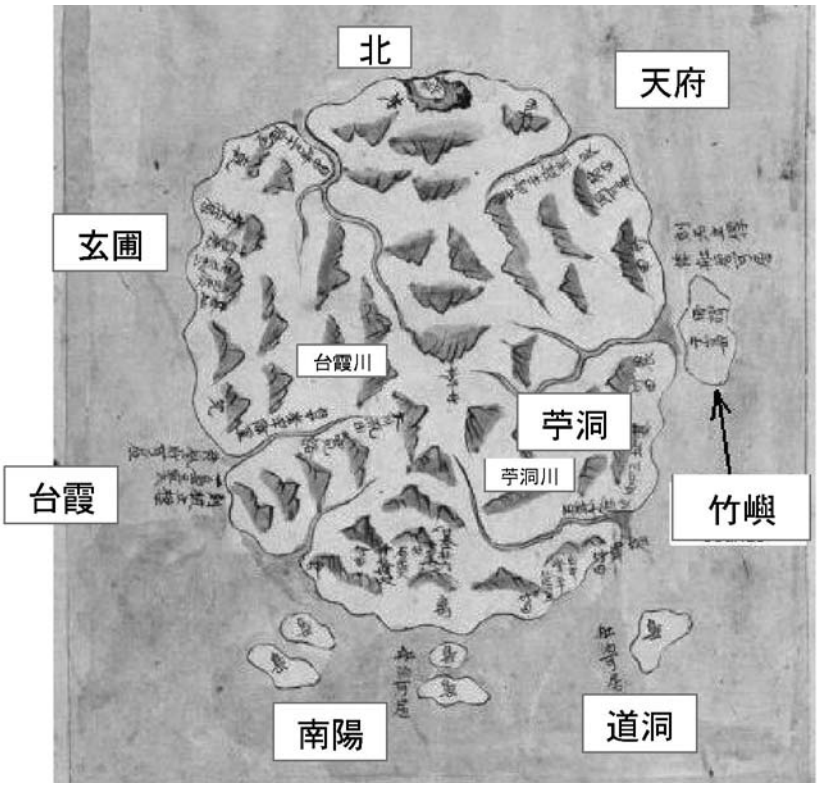

図1-7　『地乗』所収「鬱陵島図」の現地比定

とほぼ一致する。6ヶ所の島嶼が描写されていて、このなかで東に配置された島には「所謂于山島」と記されている。「于山島」の地名は東海（日本海）上の独島を指すということが通説になっていたが、最近鬱陵島付属島嶼である竹島という主張が出てきた。この面の註記には「周面二百余里、東西八十余里、南北五十余里」とあり、島の規模を記載している。特産物は甘藷、生鰒、可之魚など16種、飛禽は鷹、鳥など4種、走獣は、猫、鼠など2種が記録されている」としている。

②の『輿地図』、④の『廣輿図』の全体的構図がほぼ同じである。②や④と比べて記載内容がやや少ない。この絵図の解説では、「所謂于山島」は独島ではなく、最近鬱陵島付属の島嶼である竹島（竹嶼）という主張が出てきたことを紹介している。また、鬱陵島の地図が作製された背景として、鬱陵島に対する地理的な知識が多く流入し、日本海を中心に領土意識が高くなったという指摘は重要である。方眼式地図とは、後に触れる『朝鮮地図』、『青邱図』など、地図上に方眼線が引かれている地図を指す。

⑥『朝鮮地図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（奎16030）【図1-8】

『朝鮮地図』は1770年英祖の命を受けて製作されたとされる、朝鮮八道の郡縣図である。郡縣ごとに4.2cmの方眼または経緯線を描き、位置情報の距離と方向の正確性を期して製作されたとされる。方眼線は20里ごとに引かれ、備辺司の印（備辺司印）が押されているという。Gerry Bevers 氏は1750―68年の間としている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「鬱陵島は現在慶尚北道鬱陵郡にあたるが、朝鮮時代には江原道の蔚珍が管轄していた。しかし世宗以後、中央の統制が難しい流民の避難所となり、住民の居住を禁止する空島政策を実施した。19世紀後半になり空島政策をやめ、公式に移住民の定着を奨励した。地図に「基址」「石葬」などと書かれているのは、過去に暮らした人々の跡を意味すると考えられる。「可居」は「居住するに値する」という意味で、もし人々を暮らすようにする場合、居住させるのに適当な所という意味で書いたのではないかと思われる。肅宗 19年（1693）には鬱陵島へ漁に行った東萊

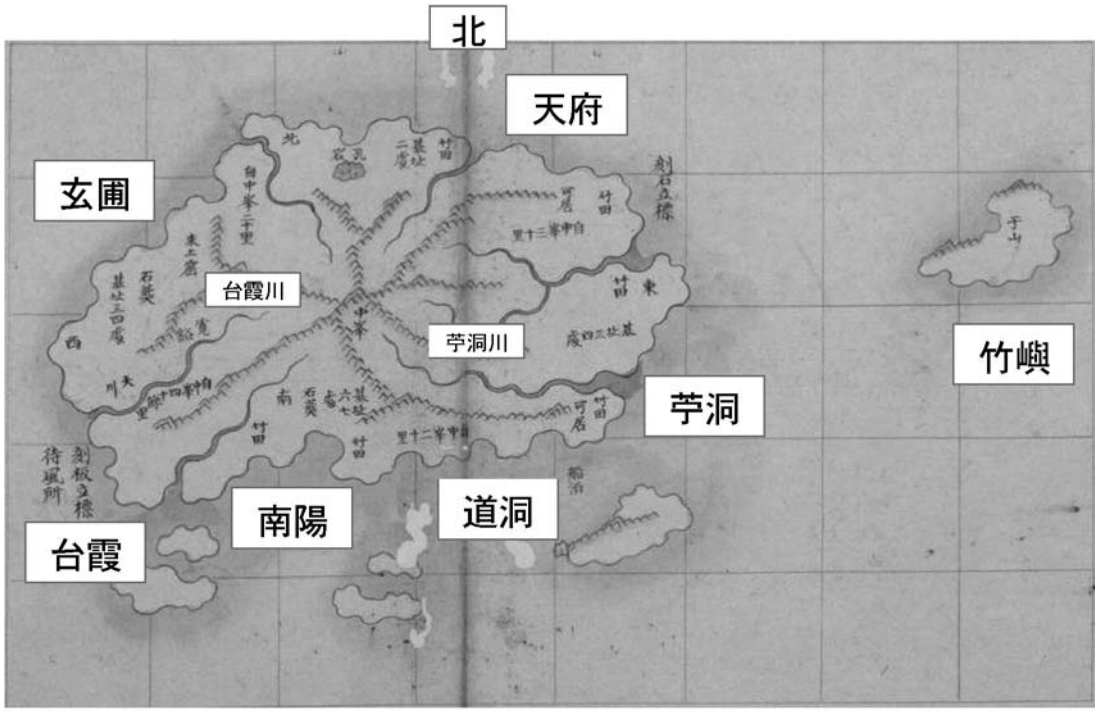

図1-8　『朝鮮地図』所収「鬱陵島図」の現地比定

の水軍安龍福が日本人漁夫に拉致され領有権紛争が起きた。以後肅宗23年（1697）に日本が対馬藩を通じて、鬱陵島の朝鮮の領有権を認め、漁夫の出入りを禁止させることを通告することで解決された。「刻石立標」、「刻板立標」はこの時立てたのではないかと推定される。「竹田」は鬱陵島の特産物を書いており、この島が海流の影響を受けて暖帯林を形成する地域であったことを示している。島右側の下に「船泊」と書かれている所は、現在鬱陵郡の郡庁所在地として位置している道洞港付近に推定される。島の全体的な模様は大部分が実際とかなり違うように描かれているが、中峰と記された聖人峯（983.6m）を中心に、四方へ伸びた河川の姿は実際に近い。その他周辺の島に対する記載もかなり大きく描かれていると言える。実際には大部分が石島くらいに過ぎない。ただ鬱陵島東に現在竹島という結構大きな島があるが、それは地図右側の于山（島）を示すのではないか思われる」としている。

②の『輿地図』、③の『海東地図』、④の『廣輿図』、⑤の『地乗』と比べると、島の形状が円であったのが、東西にやや長くなっているのが特徴である。またこれまでの絵図になかった方眼線が描かれている。これまでの絵図の註記には、島の東西を80余里、南北を50余里としている。方眼は20里（約８km）に引かれているとされていることから、絵図では東西は約90里、南北は約60里となり、数値は近いといえる。⑤の解説にあるように、②から⑤では、山地はそれぞれ独立した峰の形態で描いているのに対して、この絵図では、山地を筋、すなわち稜線を描いている。その一方で、文字の記載や河川の位置は②～⑤の記載内容とほぼ一致している。したがってこの絵図は18世紀初期から中期の絵図をもとに作製されたと推定される。この絵図でも、鬱陵島の東に「于山」と書かれた島が描かれている。鬱陵島からの距離は約30里（約12km）のところに書かれている。独島は鬱陵島の南東約90kmにあるので、この島は鬱陵島の東２kmに位置する竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。解説でも、「于山」は鬱陵島東に現在竹島（竹嶼）であるとしている。同じく方眼式地図である『青邱図』では「于山」島は、南北に長く描いているのに対して、『朝鮮地図』では南側が西に伸びて描かれている。

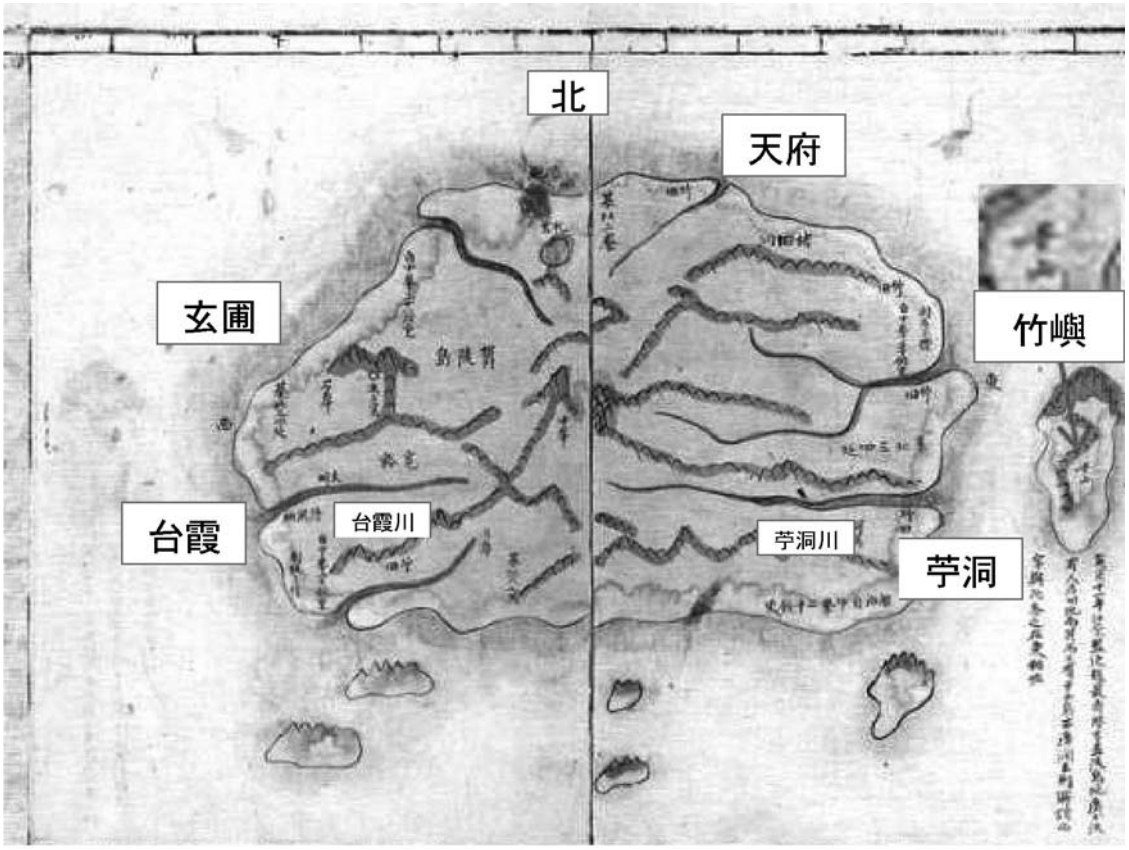

図1-9　『青邱図』所収「鬱陵島図」の現地比定

⑦『東輿図』所収「鬱陵島図」筑波大学附属図書館所蔵（ネ040-193）

『東輿図』といえば、金正浩により1860年頃作製された『東輿図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）が有名であるが、筑波大学附属図書館の解説によれば、これまで知られていた『東輿図』の形式と異なっており、絵図に記載されている地名から、この『東輿図』は1795～1800年頃と推定している（篠塚、2006）。鬱陵島の絵図は『東輿図』11に収録されている[8)]。

島の形状は、⑥の『朝鮮地図』と類似し、東西にやや長くなっている。⑥にある方眼線は書かれていない。山地も稜線を描いている。ただし稜線の描き方は⑥に比べると粗雑である。文字の記載や河川の位置も、⑥と同様、②～⑤の記載内容とほぼ一致している。中峯（聖人峯）の西側に貼紙で「鬱陵島」と記している。したがってこの地図は⑥の『朝鮮地図』をもとに作製されたと推定される。その一方で、1860年頃作製の『東輿図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）は、この絵図と基本的な構図は同じであるものの、山地、河川の描き方が粗雑で、また文字の記載も少ないことが指摘できる。

この絵図でも、鬱陵島の東に「于山」と書かれた島が描かれている。⑥とは異なり、鬱陵島のすぐ東側に描かれ、形も南北にやや長くなっている。島の北側には、山の絵が記されている。鬱陵島の東２km に位置する竹嶼（韓国名竹島）は南北に少し長く、島の北側の標高が高くなっていることから、この島は竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。なお、1860年頃作製の『東輿図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）では、「于山」島をはじめとした６ヶ所の島嶼は描かれていない。島の南東部に岩が３ヶ所描かれているのみである。

⑧『青邱図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（古4709-21）【図1-9】・韓国国立中央図書館所蔵

『青邱図』は1834年に金正浩が作製した地図である。本稿ではソウル大学校奎章閣所蔵の絵図を使用した。彩色筆写本で、乾坤の２冊ある。全国を南北に29、東西に22、枡状に分けて描いた。地図の縮尺は、216,000分の１である。二冊を上下に繋ぐと全国図になる仕組みである。鬱陵島の地図は、２冊目の第18層３、４の２枚にわたっている。

ソウル大学校奎章閣の解説によれば、まず第18層３では「本画面（第18層３）の地図は現在の慶尚北道鬱陵郡東地域に当たる。朝鮮時代には江原道蔚珍郡管轄の下にあった。地図に出ている河川の流路と島の位置及び地名は全て、大阪府立図書館所蔵の『朝鮮図』と等しく、中上側の「刻石立標」と言う表記さえ除けば、国立中央図書館の『海東輿地図』とも等しく、相互に関連があることが分かる。右側にある文言は前の２つの地図にはなく、地図の製作者が新たに添付したと判断される。解釈文は以下の通りである。「英祖11年（1735）に江原道監使趙最寿が状啓をあげて言うには「鬱陵島を調査したところ、地が広くて土地が肥えて、人の居住した跡があります。そしてその西の方にまた于山島があり、また広く開けています。いわば、西の字は、この地図に（その島が）東側にあることと異なっています。」于山島は『青邱要覧』（ソウル大学校奎章閣所蔵）にも同様に描かれているが、『東輿図』と『大東輿地図』では省略されている。金正浩は別の資料を参照しながら、于山島の存在自体を疑って略したと判断される。右側の下に「船泊」と言う字があるのは、現在の鬱陵郡郡庁がある道洞港付近に推定される」としている。

さらに、第18層４では、「本画面（第18層４）の地図は現在の慶尚北道鬱陵郡西の地域にあたる。朝鮮時代には江原道蔚珍郡管轄の下にあった。朝鮮初期までは人が住む島だったが、太宗と世宗の時ここに住んだ人を全て陸地へ移した後、空島政策を開始した。以後成宗、肅宗の時ずっと官吏を送って調査し、特産品などを捧げた。19世紀後半に入ると空島政策をやめ、公式に移住民の定着を奨励した。本地図に記載される河川の流路と島の位置及び地名は全て、国立中央図書館所蔵の『海東輿地図』、大阪府立図書館所蔵『朝鮮図』に出ており、相互に関連性があることが分かる。地図には「石葬」と言う字が、２点見えているが、朝鮮初期まで人々が住み作った石墓と判断される。北の「孔岩」は穴があいた岩と言う意味で、実際には海にある島だ。」としている。

絵図の基本的構図は、⑥の『朝鮮地図』と類似している。⑥にある方眼線は書かれず、絵図の上下左右に目盛りがある。山地は稜線を描いている。文字の記載や河川の位置も、⑥とほぼ一致している。この地図は⑥の『朝鮮地図』をもとに作製されたと推定される。

この絵図でも、鬱陵島の東側に「于山」と書かれた島が描かれている。⑦と同様に、形は南北に長く描かれ、島の北側を中心に南北にわたって、山の絵が記されている。この島は竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。「于山」島のすぐ下側（地図右下）の註記はこの地図と、国立国会図書館所蔵の『大東輿地図』に記されている。1735年江原道監事による調査について述べられている。于山島は鬱陵島の西の方にあり、土地が広く開けているとしているが、地図では于山島は東側に描かれていると指摘している。塚本孝氏によれば、この記述の出典は、『備辺司謄録』英祖11年（1735）正月条にあたり、それによれば、この年は鬱陵島捜討が中止されており、地図にある鬱陵島の記述は、1697～98年頃に、鬱陵島にかかわる日朝交渉に関係して鬱陵島へ派遣された巡検使（張漢相）の報告のようであるとしている（塚本、1980）。鬱陵島の現地調査が度々実施されたにもかかわらず、18世紀に至っても于山島は地理的に混乱がみられたことが注目される。解説にあるように、『東輿図』（1860年頃）と『大東輿地図』（1861年）（いずれもソウル大学校奎章閣所蔵）では、于山島は省略されている。ただし、国会図書館所蔵の『大東輿地図』には、鬱陵島の東側に于山島が記されている。解説にあるように、「金正浩は違う資料を参照しながら、

于山島の存在自体を疑って略したと判断される」という指摘は重要である。于山島は現在の竹嶼（韓国名竹島）に比定しつつも、文献資料の記載とのずれを認識していたと考えられる。こうしたことから、于山島の地理的認識は混乱していたとみられ、現在の独島に比定するのはかなり無理があるといえる。この地図に相互関連性がみられるとされる韓国•国立中央図書館所蔵の『海東輿地図』、大阪府立図書館所蔵『朝鮮図』は未見である。今後の課題としたい。

⑨『青邱全図』所収「鬱陵島図」天理図書館所蔵

『青邱全図』は天理図書館所蔵で、1987年に朝鮮学報124号、125号に、解題付で、影印復刻されたものである。金正浩が1834年に作製した地図『青邱図』の筆写であるとされる。天理図書館には、『青邱図』の写本がこのほかに３点あるという。

鬱陵島の地図は、２冊目（坤）の第18層 3、４の２枚にわたっている。絵図の基本的構図は、⑧の『青邱図』と同じである。ただし河川や山地の記載が、⑧と比べて粗雑である。文字も⑧では、台霞に比定される地点に、「待風所」とあるべきところが、「候風所」と写し間違いがみられる。この絵図でも、鬱陵島の東側に「于山」と書かれた島が描かれ、形は南北に長く描かれている。島の南北に山の絵が記されている。この島は竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。⑧の『青邱図』にみられた「于山」島のすぐ下側の註記は記されていない。

この地図で注目されるのは、地図の冒頭に収録された「新羅九州郡縣総図」、「高麗五道両界州縣総図」、「本朝八道州縣図総図目」である。すなわち、新羅時代、高麗時代、朝鮮時代の朝鮮全図が収録されている。朝鮮半島の東側には、いずれの地図にも現在の鬱陵島が描かれているが、地図によって名称が異なっている。新羅時代には「于山」、高麗時代には「羽陵」、朝鮮時代には「鬱陵」と記されている。韓国側の研究では、于山島が日本の松島にあたるという記載をもって、于山島は現在の独島であり、于山が新羅時代から登場することから、現在の独島は新羅時代から韓国により支配されているとしているが、朝鮮王朝時代の地理的認識では、「于山」とは現在の鬱陵島のことであり、現在の独島を指していないということが明瞭に分かる。今後韓国側の文献について史料批判が必要であるといえる。

⑩『東輿図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（奎10340）

『東輿図』は1860年頃に金正浩が作製した地図である。ソウル大学校奎章閣の解説では、19世紀中期（哲宗年間、1849〜1863）としている。彩色筆写本で、23帖にわたる。鬱陵島の地図は15-1、江原道東海市、三旺市、蔚珍郡北部とともに収録されている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「鬱陵島では「三峯挿天」として、聖人峯の雄大壮厳さを表現している。島内に船が停泊することができる所、風を待つ所、家の跡地、居住可能な所などが記録され、人々が実際に居住したとみられ、孔巖や朱土窟など景色が美しい所も一緒に記録した」としている。

島の形状は、⑥の『朝鮮地図』と類似しているものの、⑥では島内の海岸線が実際の地形にあわせて凹凸がみられるのに対して、この地図では東西に長い単純な楕円形となっている。島の形状は東西にやや長くなっている。⑥にある方眼線は書かれていない。山地は稜線を描いている。ただし稜線の描き方は⑥に比べると粗雑である。文字の記載や河川の位置も、⑥と類似している。鬱陵島の島名は中峯（聖人峯）の北側に記している。中峯の北側に記した「三峯挿天」という記載はこの絵図のみにみられる。この地図は⑥の『朝鮮地図』、⑧の『青邱図』をもとに作製されたと推定される。先に触れたように、この地図には、他の絵図でみられた「于山」島をはじめ、６ヶ所の島嶼は描かれていない。島の南東部に岩が３ヶ所描かれているのみである。道洞、苧洞付近の岩を書いたと考えられる。

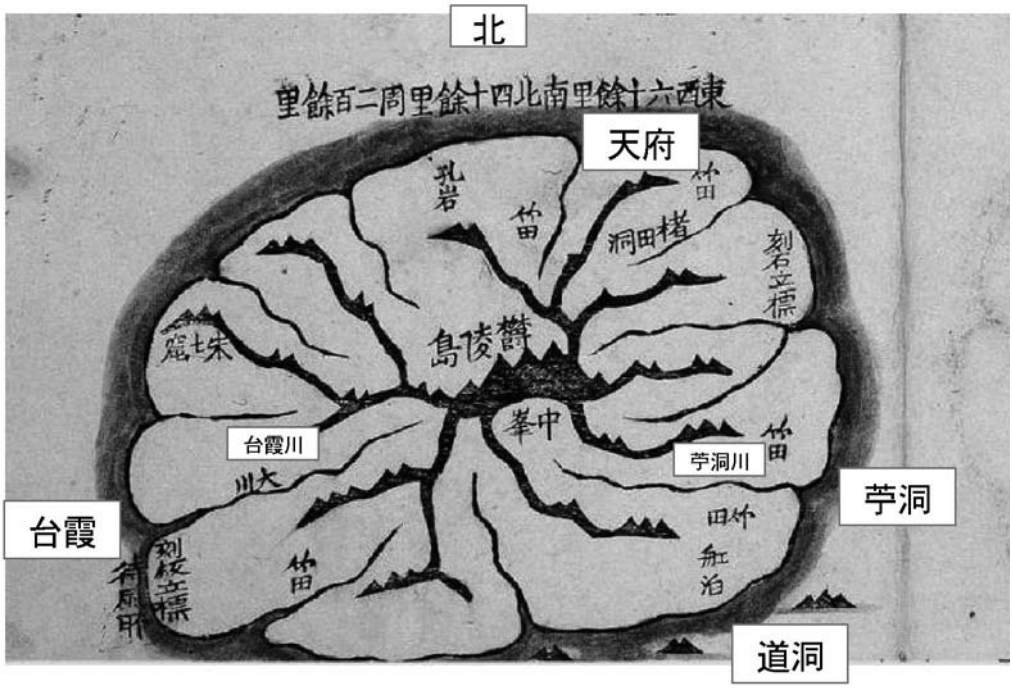

図1-10　『大東輿地図』所収「鬱陵島図」の現地比定

⑪『大東輿地図』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（奎10333、12380）【図1-10】

『大東輿地図』は哲宗12年（1861）に金正浩が作製した地図である。彩色筆写本で、22帖にわたる。鬱陵島の地図は14帖１に収録されている。ソウル大学校奎章閣の解説によれば、「地図の上の鬱陵島は現在慶尚北道鬱陵郡にあるが、朝鮮時代には江原道の蔚珍が管轄した。しかし朝鮮時代初期から流民らの避難所と認識され、住民を全て本土へ移し、空島政策を開始した。世宗以後には公式に人が居住しないと知られ、19世紀後半に入り公式に移住民の定着を奨励した。現在の姿と少し違うところがあるが、現在の聖人峯（983.6m）にあたる「中峯」を中心に四方へ伸びた河川の姿が実際に近い。中峯の東南に「舡泊」と表示されているのは、現在鬱陵郡郡庁がある道洞港である。中峯の西南方向に「待風所」があるのは鬱陵郡西面の中心地である。島の中には「竹田」が多く表示されているのは、海流の影響で暖帯性である竹が多く自生する地域であることを示す。これ以外に「刻板立標」と「刻石立標」という字が書かれているのは『大東地志』にはその来由が全然書かれていない。海岸には石島が３個だけ記されている。」としている。

島の形状は、⑩の『東輿図』と類似し、この地図でも東西に長い単純な楕円形となっている。方眼線も書かれていない。山地は稜線を描いているものの、稜線の描き方は⑩に比べると粗雑となっている。文字の記載や河川の位置も、⑩と類似している。しかし、中峯までの距離（「（自）中峯二十餘（里）」など）や、かつての集落跡の記載（「基址三四処」など）、居住可能な場所を示す「可居」はみられない。また⑩の地図で、中峯の北側に記した「三峯挿天」という記載もみられない。鬱陵島の島名は、⑩と同様に、中峯（聖人峯）の北側に記している。島の北側には、「東西六十餘里、南北四十餘里、周二百餘里」と、鬱陵島の東西・南北の長さと周囲の長さを記している。③の『海東地図』などで記された東西80余里、南北50余里と数値が変わっている。この地図は⑩の『東輿図』をもとに簡略化されて作製されたと推定される。またこの地図では、⑩の『東輿図』と同様に、他の絵図でみられた「于山」島をはじめ、６ヶ所の島嶼は描かれていない。島の南東部に岩が３ヶ所描かれているのみである。

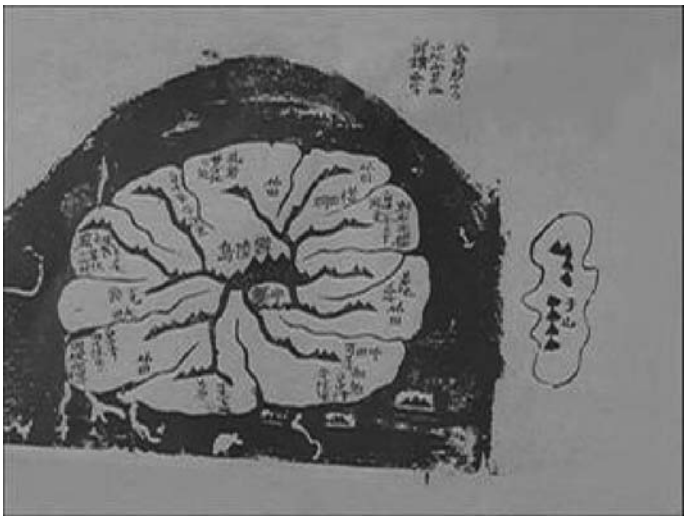

図1-11　『大東輿地図』（国立国会図書館所蔵）所収「鬱陵島図」

なお、解説に記している『大東地志』は、同じく金正浩が1863年に作成した地誌である。鬱陵島の項目には、記事の最後に、英宗11年（1735）の江原道監司による鬱陵島の調査（実際には調査せず）についての記載が引用されている。またその直前の肅宗28年（1702）には、三陟営将李浚明が鬱陵島に渡り、鬱陵島の地図と紫檀香、青竹などを献上していると書かれている。日本の鬱陵島への渡航禁止後、朝鮮王朝により度々調査が実施され、地図が作製されていたことが文献上確認できる。

⑫『大東輿地図』所収「鬱陵島図」国立国会図書館所蔵【図1-11】

『大東輿地図』のうち、国立国会図書館が所蔵する筆写本である。哲宗12年（1861）に金正浩が作製した地図の写しである。鬱陵島の地図は14帖に収録されている。塚本孝氏により紹介されている（塚本、1980）。地図の基本的構図は、⑪の『大東輿地図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）と類似している。島の形状は、この地図でも東西に長い単純な楕円形となっている。山の稜線や河川の描き方も同じである。しかし文字の記載については、中峯までの距離（「自中峯二十餘里」など）や、かつての集落跡の記載（「基址三四処」など）、居住可能な場所を示す「可居」がみられる。文字の記載は、⑧の『青邱図』と類似している。鬱陵島の島名は、⑩や⑪と同様に、中峯（聖人峯）の北側に記している。⑪にみられた鬱陵島の東西・南北の長さと周囲の長さの記載はみられない。この地図は⑧の『青邱図』や⑩の『東輿図』をもとに作製されたと推定される。

この地図では、鬱陵島の東側に「于山」と書かれた島が描かれている。⑧と同様に、形は南北に長く描かれ、島の南北にわたって、山の絵が記されている。この島は竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。しかし、他の絵図に記載のみられた「于山」島以外の５ヶ所の島嶼は描かれていない。島の南東部に岩が３ヶ所描かれているのみである。地図の上には、⑧にみられた註記、英宗11年（1735）の江原道監司による鬱陵島の調査（実際には調査せず）についての記載がみられる。19世紀後期においても、于山島は竹嶼（韓国名竹島）として認識されていたことが分かる。

⑬『青邱要覧』所収「鬱陵島図」ソウル大学校奎章閣所蔵（古4709-21A）【図1-12】

『青邱要覧』は金正浩が作製した地図である。『青邱図』の異本９点のうちの一つとされる。彩色筆写本で、乾坤２冊とになっている。南北で29、東西では22に分けられている。ソウル大学校奎章閣の解説では、19世紀後期～20世紀初期（高宗年間：1863―1907）の作製としている。鬱陵島の地図は２冊目（坤）

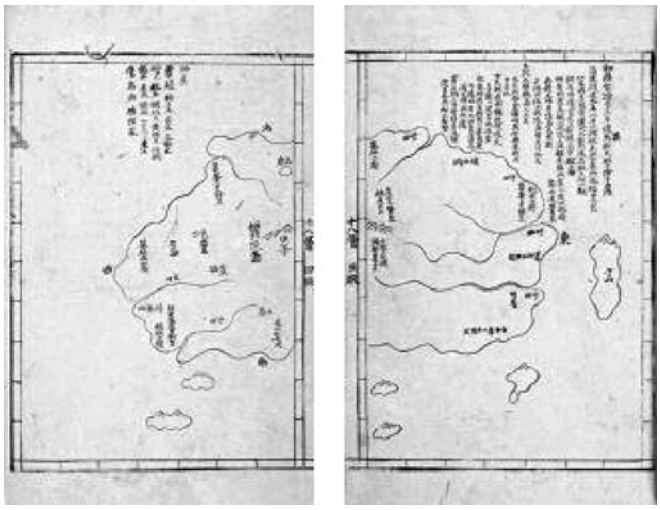

図1-12　『青邱要覧』所収「鬱陵島図」

の18層３、４に収録されている。

ソウル大学校奎章閣の解説では、まず第18層３（鬱陵島東･于山）では、「現在は慶尚北道鬱陵郡にあたるが、この地図が作られた朝鮮時代には江原道蔚珍県が管轄した。しかし世宗以後中央の統制が難しい流民の避難所となり、住民の居住を禁止する空島政策を開始した。19世紀後半になり空島政策をやめ、公式に移住民の定着を奨励した。地図の上に表記した「基址」･「石葬」などは、過去に暮らした人々の跡を意味すると考えられ、「可居」は「居住するに値する」という意味を持っており、空島政策放棄以後、人々を移住させるために適当な所を表示したのではないかと思われる。1693年（肅宗19）には鬱陵島に漁へ行った東萊の水軍安龍福が日本人漁夫に拉致され、領有権紛争が起きた。以後 1697年（肅宗 23）に日本が対馬藩を通じて、鬱陵島の朝鮮の領土権を認め、漁夫の出入りの禁止を通告することで解決された。そして鬱陵島東海岸と南西海岸に表示されている「刻石立標」･「刻板立標」はこの時に立てられたのではないかと推定される。鬱陵島周辺の島の描写はかなり大きく描かれているとみられる。実際には大部分が石島くらいに過ぎないからである。そして「于山」（島）については地図右上端に記録された註記を通じ、地誌的情報を補っている。註記によれば、于山島は512年（智證王13）に新羅の異斯夫の征伐以前まで、一つの「国」であったが、実際の鬱陵島周辺にはこのくらいの大きさの島が存在しないことから、地図の上に大きく誇張して描いた可能性がある。または度々鬱陵島へ侵入した日本人を意識して、この地域の領土意識を見せるために誇張して描いた可能性も考えられる。于山国に関する内容のほかに註記には、鬱陵島での居住について記録し、日本人漁夫との関係についても記録している。」としている。

さらに、第18層４では、「『青邱要覧』では二つの版（18層３版と18層４版）に鬱陵島を描いている。この２つの版を連結した鬱陵島の姿及び、その周辺の島に対する情報は、国立中央図書館所蔵の『海東輿地図』と非常に似ている。『海東輿地図』に表示されている山脈が省略されているだけで、山なみの姿、そして地図の上に表示された情報面もほぼ一致するので、２つの地図の連関性が分かる。『青邱図』の場合には山脈の全体的な姿まで『海東輿地図』と非常に似て描かれている。奎章閣所蔵の『朝鮮地図』とその姿を比べてみると、全体的な姿及び情報はある程度似ているが、『朝鮮地図』の鬱陵島の海岸線には屈曲が多く表示されているのに対して、『青邱要覧』では海岸線が緩く描かれている。また于山島の形も、南北で長い卵円形に近く描かれている『青邱要覧』は、『海東輿地図』の形と似ていて、『朝鮮地図』に表示された于山島の形は、南北方向よりは斜め横になっている姿に近い。そして『青邱要覧』の後に製

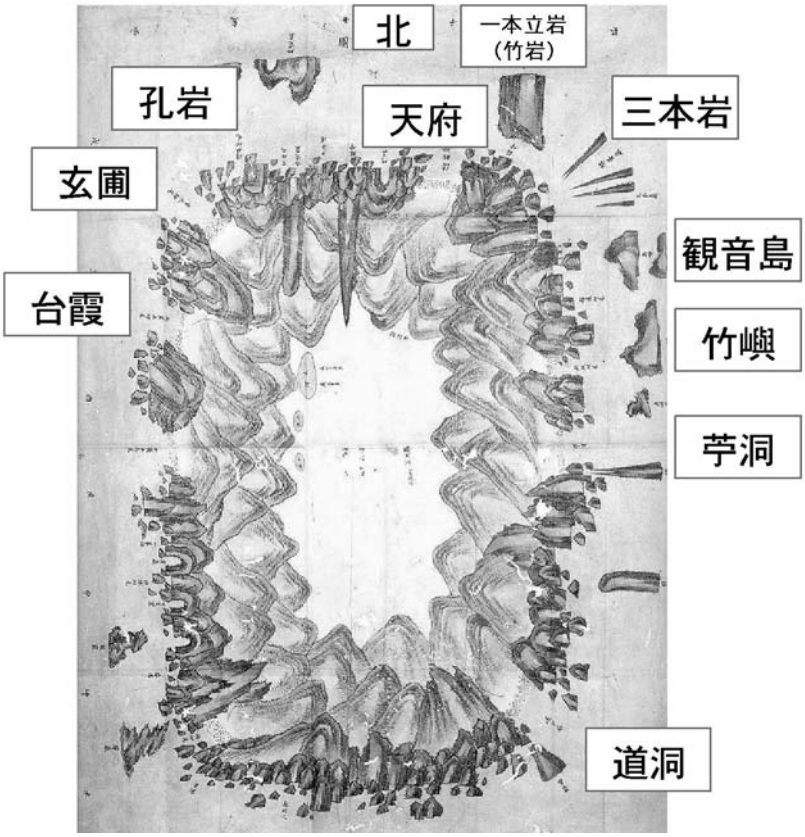

図1-13　『鬱陵島外図』の現地比定

作された『東輿図』と『大東輿地図』に描かれた鬱陵島とは、水かさの姿で差が見えながら、島全体の形も差があり、于山島が描かれていない。この地図上端には「物産」という項目を別に設定した註記がある。鬱陵島の地図のあちこちには「竹田」の字が書かれている。これは鬱陵島の特産物を書いており、この島が海流の影響を受けて暖帯林を形成する地域であったことを示している」としている。

絵図の基本的構図は、⑧の『青邱図』と類似している。河川の位置は一致している。また⑧と同様に、絵図の上下左右に目盛りがある。しかし山地は中峯（聖人峰）付近に山の絵が記されているのみで、他は記されていない。文字の記載も⑧とほとんど一致するものの、港の位置を示す「船泊」が記されていない。また中峯の周辺には「石壁石澗洞壑甚多」などの記載がみられる。この記載は、同じく金正浩が1863年に作成した地誌『大東地志』にもみられる。さらに、註記として、地図の右上部には、島の歴史について、左上部には物産が記されている。いずれの記載も『大東地志』と一致しており、前者の鬱陵島の歴史については、新羅時代から肅宗期までの歴史をまとめて記している。肅宗期の記載は、李浚明が鬱陵島の調査後に、鬱陵島の地図を献上したことを記しており、これは『大東地志』の肅宗28年(1702)三陟営将李浚明による鬱陵島調査を指すとみられる。この地図と李浚明が作製、献上した鬱陵島の地図との関係は明らかではない。この地図は⑥の『朝鮮地図』や⑧の『青邱図』をもとに作製されたと推定される。

この絵図でも、鬱陵島の東側に「于山」と書かれた島が描かれている。⑧と同様に、形は南北に長く描かれ、島の北側に山の絵が記されている。この島は竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。ソウル大学校奎章閣の解説では、「于山島は512年（智證王13）に新羅の異斯夫の征伐以前まで、一つの「国」であったが、実際の鬱陵島周辺にはこのくらいの大きさの島が存在しないことから、地図の上に大きく誇

図1-14　『大韓新地志』所収「鬱島図」の現地比定

張して描いた可能性がある。」とあるものの、註記には「于山島」とせず、「于山国」としている。⑨の天理図書館所蔵『青邱全図』に収録された新羅時代の朝鮮図「新羅九州郡縣総図」では、現在の鬱陵島を「于山」としていることからも、「于山国」は現在の鬱陵島を指していると考えられる。高麗時代の武陵島も現在の鬱陵島を指している。この地図では註記の説明が他の絵図より詳しいところに特徴があるといえる。

⑭『鬱陵島外図』ソウル大学校奎章閣所蔵（奎10339）【図1-13】

1882年朝鮮王朝により鬱陵島検察使として派遣された李奎遠の調査により作製された絵図である。島の形状は、これまでの絵図と大きく変わり、南北に長くなっているが、海岸の岩、島嶼、浦などを詳細に描いた点に特徴がある。この絵図については、すでに下條座長により、『鬱陵島検察日記』とともに分析した成果がまとめられている（下條、2005）ので、ここでは詳細は省略する。「竹島」は竹嶼（韓国名竹島）、「島頂」は観音島、「大巌」は一本立岩（竹岩）、「虹霓巌」は孔岩、「道方庁」（浦）は道洞、「苧浦」は苧洞、「倭船艙」は天府、「大黄土邱尾」は台霞などというように、現地での比定が可能であり、いずれもほぼ正確に描かれていることが分かる。ソウル大学校奎章閣の解説では、「鬱陵島の古地図で特に気を引くことは、独島であるが、この地図では独島と模様が似ている島を「虹霓巌」として記録したのが注目される。しかしそれが島の北の方に描かれているという点が変である」としている。「独島と模様が似ている」というのは、竹島（独島）の北に位置する五徳島のことを指していると考えられる。五徳島は穴が開いている島である。しかし、この地図に描かれている「虹霓巌」は、鬱陵島の北側に位置する孔岩のことである。実際この岩には絵の通り穴が開いている。この絵図には、現在の竹島（独島）は描かれておらず、李奎遠は調査も実施していない。つまり、朝鮮王朝は19世紀後期においても現在の竹島（独島）を鬱陵島の属島として、ひいては自国領して認識していないことが分かる。

⑮『朝鮮輿誌』所収「欝陵島図」国立国会図書館所蔵

塚本孝氏により紹介された絵図である(塚本、1980)。作製年代は不詳であるが、19世紀頃と推定されている。鬱陵島の地図は『朝鮮輿誌』の第5帖「黄海道・江原道」の巻末に収録されている。絵図の基本的構図は、②から⑤の欝陵島図に似ている。特に山の描き方や文字の記載内容から、④『廣輿図』に類似している。文字の記載内容は、苧洞付近に「石葬十餘里（処カ）」が④にない以外、一致している。鬱陵島に付属する島嶼は、②から⑤と同様に6ヶ所描かれている。このうち鬱陵島の東側の島には「所謂于山島」と書かれ、竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。

⑯『大韓新地志』所収「欝島図」独島博物館所蔵【図1-14】

『大韓新地志』は1907年張志淵によって書かれた地誌である。独島博物館で展示されていたが、展示では「大韓全図」と称する朝鮮半島全図を示していた。「大韓全図」では、朝鮮半島の東に、島が描かれ「欝島」と記している。鬱陵島の東側には何も描かれていない。さらに慶尚道図には、地図に左下に「欝島」の拡大図が収録されている[9]。島の形状は南北に長く、現状とはかなり異なった形となっている。集落としては、道洞、南陽洞、そして聖人峰の麓にある羅里洞が描かれている。島の東側には「竹」と書かれた島が描かれている。これは現在の竹嶼（韓国名竹島）であるとみられる。島の形状、集落の記載などから、この地図は、これまでの鬱陵島の地図をもとに作製したのではなく、鬱陵島での調査により新たに作製されたと考えられる。なお、『大韓新地志』の本文には「于山島はその東南にある」と記している。韓国側の研究では、この「于山島」が現在の独島としているが、『大韓新地志』巻二の欝島（鬱陵島）の説明の多くは、『大東地志』など朝鮮王朝時代の地誌の内容とほぼ一致しており、近代の記述はごくわずかである。地図に記された竹島（竹嶼）の説明もみられない。さらに鬱陵島の位置は、東経（本文では北緯と間違って記している）130度45分から130度35分としている。独島（竹島）は東経131度52分に位置する。「于山島」の位置も記されていない。したがって、この「于山島」は現在の独島（竹島）である可能性は低いといえる。朝鮮王朝時代からの地理的認識に基づき、韓国側では、20世紀に入っても、「于山島」について地理的混乱がみられたことが分かる。今後、地誌の本文と附図の記載内容について史料批判をする必要があると思われる。

3）韓国側の反論について

①韓国・北東アジア歴史財団による反論

Gerry Bevers氏による『欝陵島図形』の解釈、「所謂于山島」に「海長竹」が生えていたことから、「于山島」は現在の独島ではなく、現在の竹嶼（韓国名竹島）であることについては、山陰中央新報、共同通信などが2月22日付で「独島問題で韓国側主張を覆すことができる古地図が発見された」という記事を掲載した。それに対して、最近韓国側から以下のような反論がみられた。

まず、韓国・北東アジア歴史財団による反論が2007年2月24日に、ノーカットニュースで報道されている[10]。『欝陵島図形』については、「①「所謂于山島」と言う部分は、鬱陵島北にある現在のサムスン岩や象岩などと違い、鬱陵島の南側に4つの島嶼と一緒に輪郭だけ表示。②ところが、実際鬱陵島の南側には地図に出ている島々にあたる島がないし、これは探査の過程から具体的な観察で描かれたというよりは、伝えて聞いた話をもとに描いたと推定される。③「海長竹田所謂于山島」は捜討官が具体的に調査せずに、海岸に沿って長く竹がある竹嶼と、当時安龍福の活動を通じて明確に現われた于山島(独島)を描いたと推定される。④当時我が国は独島（于山島）の存在を確かに認識していた。これは1711年の朴錫昌の鬱陵島捜討の直接的きっかけとなった安龍福の活動を通じて明確に分かった。⑤最近(2005年)

安龍福の２回目の渡日活動に関する調査報告書が日本の隠岐島で発見されたが、その文書には安龍福が朝鮮と鬱陵島、鬱陵島と独島の距離を明確に述べ、日本で「竹島、松島」という島が朝鮮国江原道に附属した「鬱陵島、子山島」と記録。⑥すなわちここで子山島（于山島）が鬱陵島の隣にある竹嶼ではないことをさらに明確にすることで、我が国の独島に対する領土意識を確かに立証。」としている。

また、1834年金正浩が描いた『青邱図』については、「①これもまた南側に５個の島が描かれているが、実際鬱陵島の南側には島嶼がないし、日本側の主張通りなら、南側の４㎞以内に５個の島がなければならないのに、実際は一つの島も存在しないこと。②鬱陵島からいつも見える島には竹嶼以外に観音島があるが、その距離は鬱陵島周辺でわずか100m 以内にある。③金正浩の青丘図が描かれた当時も独島（于山島）が我が国の領土であることを確かに認識。これは1834年頃に編纂された「万機要覧」（1808年）の軍政の項を見れば、鬱陵島と于山島は皆于山国の地だとし、ここで于山島が日本が言う松島と明確に記録」としている。

さらに絵図全般に関しては、「①日本側が提示した上記２枚の地図はすでに国内に知られているだけでなく、日本の竹島問題研究会の研究者も知っている内容で、これをまるで初めて発見されたものだとして、また地図や文献の正確な製作年代が分かっているものを年代不詳と曖昧に記述している。②また朴錫昌や金正浩の地図全体を見せないで、一部分のみを取り上げ拡大して見せること。③２月22日竹島の日を迎え、一件を持ち上げ、日本国民を刺激して、独島の歴史を歪曲しようとする意図以外考えられない」としている。

まず、『欝陵島図形』については、①これまでの分析で明らかにしたように、鬱陵島の南部に描かれている島は、鬱陵島南部にある岩や島内の岩を誇張して描かれていたと推定される。それ以外の記載は、ほぼ正確に現在の鬱陵島を描いていることから、絵図の記載内容について十分資料的価値があるといえる。②「これは探査の過程から具体的な観察で描かれたというよりは、伝えて聞いた話をもとに描いた」というのは根拠がない。1711年の『欝陵島図形』も実際の調査で作製されている。また1694年に朝鮮王朝から張漢相らが鬱陵島へ調査のため派遣された際にまとめた『蔚陵島事蹟』や当時の『朝鮮王朝実録（粛宗実録）』をみると、実際に鬱陵島の調査を実施し、地図も作製している。③「「海長竹田所謂于山島」は捜討官が具体的に調査せずに、海岸に沿って長く竹がある竹嶼と、当時安龍福の活動を通じて明確に現われた于山島（独島）を描いた」という指摘も根拠がない。絵図からは、独島が記載されているとは読み取れない。しかも、1694年張漢相らは鬱陵島の東側に「海長竹」が生えた島を確認しているので、具体的な調査をしていないという解釈は明らかに間違っている。④当時鬱陵島は空島政策により渡海禁止となっていたにもかかわらず、安龍福は鬱陵島に渡り、帰国後罰せられている。安龍福という、一個人、しかも罪人の空間認識が朝鮮王朝の地理的認識になるのであろうか。⑤⑥隠岐で発見された文書は、安龍福の証言を記したものに過ぎない。一個人（罪人）の供述が、朝鮮王朝の地理的認識、領土意識を示すのであろうか。

次に1834年金正浩の『青邱図』については、①これまでの分析で明らかにしたように、『青邱図』では鬱陵島の南側に５個の島を、従来の絵図をベースとしてかなり誇張して描いている。しかし、同じく金正浩の『東輿図』（1860年頃）、『大東輿地図』（1861年）では、５つの島は消え、鬱陵島の南東部に３つの岩が描かれている。また、『大東輿地図』（1861年）では、引き続き「于山」島を描き、距離から竹嶼（韓国名竹島）に比定される。したがって金正浩の絵図は、現在の鬱陵島をほぼ正確に描いており、資料的価値があるといえる。②観音島については、明治16年（1883）の「鬱陵島図」（国立公文書館所蔵「朝鮮国蔚陵島出張桧垣内務少書記官復命ノ件」）によれば、「観音崎」としていることから、当時島ではなく、岬と認識されていた可能性がある。③1808年の『万機要覧』（『行ってみたい我が領土、独島』、p.24

に収録）には、「鬱陵島と于山島は皆于山国の地とし、于山島が日本の言う松島」と記録しているが、これは『輿地志』（1656年）という文献を引用しているだけで、当時の鬱陵島の調査に基づく記載ではなく、『東国文献備考』（1770年）の記載を踏襲しているだけである。また下條座長によれば（下條、2005）、引用された『輿地志』は現存していないことから、領有権の根拠にはなりえず、史料批判が必要である。

最後に、絵図全般に関しては、①従来の研究で、『鬱陵島図形』や『青邱図』は取り上げられているものの、『鬱陵島図形』に記される「海長竹田」の記載や、『青邱図』での距離を示す目盛の存在については、従来の研究では取り上げられておらず、挙げ足を取るような指摘である。②「朴錫昌や金正浩の地図全体を見せないで、一部分のみを取り上げ拡大して見せ」たとしても、見解は変わらない。③ Gerry Bevers 氏による分析は、従来の韓国側でみられなかった絵図の緻密な分析であり、「独島の歴史を歪曲しようとする意図以外考えられない」というのは的外れの指摘である。

②独島博物館の反論

大邱日報（2007-03-19）によると、上記の『鬱陵島図形』については、独島博物館の館長の反論が掲載されている[11]。それによれば、「独島博物館長は、「古地図３枚を確認してみた結果、だれが見ても独島ではなく竹嶼であると分かり、また我が国の学界でも竹嶼と判断しているのだが、日本は古地図の全部を見せないで、拡大して一部だけ見せることで、自分たちのごりおしの主張を隠蔽している」と言った。一方独島は我が国では、于山島 1432―三峰島 1476―子山島 1696―石島（大韓帝国勅令第41号）―独島 1904と呼ばれてきた」とある。

①これまでの韓国側の研究で、該当絵図に記載される鬱陵島の東側の小島を、現在の竹嶼と解釈したのはほとんどみられなかった。これは研究会での現地調査の成果、解釈とも一致したこととなり、注目される意見といえる。②ただし、該当の絵図の竹嶼にあたるところには、「所謂于山島」と書いてあるにもかかわらず、コメントにはそのことが記載されていない。この絵図から、韓国側の主張である于山島＝独島（竹島）という解釈は成り立たないにもかかわらず、それについては解釈を避けている。これは明らかに自国にとって不利なところを避けていると言ってよい。③先にも述べたが、「地図の一部しか見せず、全部を見せていない」というが、該当の絵図の全体をみても、その距離から、「于山島」は現在の独島であるとはいえず、見解を否定したことにはならない。

③竹島＝独島問題ネットニュースでの反論

「竹島＝独島問題ネットニュース６（2007.3.14）」によれば、上記の『鬱陵島図形』については、以下のように記されている。「９.「独島：韓国側の主張覆す古地図発見＝共同通信」（朝鮮日報、2007.2.23）このうち年代不詳の地図では、鬱陵島の東側に描かれた小島に「所謂（いわゆる）于山島」と記され、その下に「海長竹田」と書かれている。ビーバーズ氏は、「海長」とは竹の種類を指すとみられ、「于山島」は竹が生えない不毛の岩の塊である独島ではないと指摘した。【コメント】この地図「鬱陵島圖形」は朴昌錫作、ソウル大学奎章閣所蔵、請求記号は奎12166。于山島を描いた地図は数百枚くらいはあるでしょうか。そのうちの数枚の地図から于山島を独島ではないと結論づけるのは針小棒大の感があります」としている。

「于山島を描いた地図は数百枚くらいある」というのであれば、数百枚の地図のうち、どの地図に于山島が現在の独島を正しく描いているのかを提示する必要があるのではないだろうか。これまでの研究会での検討では、現在の独島を描いた絵図は１枚も確認されていない。

④「韓国古地図に記された独島図案の切手を発行」について

反論ではないが、韓国・聯合ニュース（2007.2.26）によれば、「古地図に記された独島図案の切手を発行」としている[12)]。記事は以下のように記している。「郵政事業本部は26日、「韓国の古地図」をあしらった特別切手を発行することを明らかにした。デザインは「我国総図」「大東輿地全図」「八道総図」「混一強理歴代国都市図」の４種類。デザインの基となった古地図には白頭山と鬱陵島・独島がはっきりと見て取れ、北方地域に対する先人たちの関心の高さがうかがえる。特に「我国総図」は朝鮮王朝の正祖（1776～1800年）時代に作成の輿地図に収録された朝鮮全図で、白頭山のほか、鬱陵島の東側に「于山島」の名称で独島が正確に記されている。」

記事のなかで書かれている絵図の表題のなかで、最後の表題は「混一歴代国郡都彊理地図」が正しい。すでに中間報告書で触れたが、「于山島」の記載はあるものの、いずれも現在の独島を描いたものではない。「混一歴代国郡都彊理地図」（16世紀中期）では鬱陵島は描かれず、「于山島」のみが描かれているので、この「于山島」は現在の鬱陵島を指している。「八道総図」（1530年）は「于山島」を鬱陵島の西側に描いており、鬱陵島の西側にはそうした島はないことから、「于山島」を地理的に認識せず、地理的混乱を示している。「我国総図」（18世紀末期）では、「于山島」を鬱陵島の東側に描いているものの、距離から現在の独島ではなく、竹嶼（韓国名竹島）である。「大東輿地全図」（1860年代、金正浩作製、崇實大学校博物館所蔵）には、鬱陵島はあるものの「于山島」は描かれていない。

４）韓国側史料の解釈について

最後に、韓国側の文献のうち、絵図や地理的認識にかかわる文献について、若干検討することとしたい。

①張漢相『蔚陵島事蹟』について

この史料は、1694年のいわゆる元禄の竹島一件により、朝鮮王朝から張漢相らが鬱陵島へ調査のため派遣された際にまとめられたものである。史料の一部、竹嶼（韓国名竹島）、独島にかかわる部分が『行ってみたい我が領土、独島』（p.135）に収録されている。また宋炳基氏の「朝鮮後期の鬱陵島経営」でも詳しく紹介されている（内藤訳、1999）。張漢相らは総勢150名で、13日間鬱陵島に滞在し調査を行なった。調査成果は、『朝鮮王朝実録（粛宗実録）』にも記されているが、『蔚陵島事蹟』の方がより詳細に記されている。張漢相は、調査の結果を、山川・道里を記した地図とともに、朝鮮王朝に報告した。報告では、倭人が往来した痕跡はあるが住んではいないこと、海路が穏やかでなく日本が横占しても除防が難しいこと、土地が狭く大きな木が多く人民を居住させるのは難しいこと、土質から麦を植えてきたことなどが記されているという。この史料で注目されるのは以下の記載である。

「東側五里ほどに一つの小さな島があるが、高大ではなく海長竹が一面に叢生している。雨が晴れ霧の深い日、山には入って中峰に登ると南北の両峰が見上げるばかりに高く向かい合っているがこれを三峰という。西側を眺めると大関嶺のくねくねとした姿が見え、東側を眺めると海の中に一つの島がみえるが、はるかに辰方に位置して、その大きさは蔚島の三分の一未満で（距離は）三百余里に過ぎない。」（内藤訳、1999）

上記の記載から、注目される点が２点確認される。

１点目は、鬱陵島の東側に５里（約２㎞）に島があること。島には海長竹が一面に叢生していることである。ということは、この島は、鬱陵島の東約２㎞に位置する現在の竹嶼（韓国名竹島）にあたる。しかも先に記したソウル大学校奎章閣所蔵「欝陵島図形」には、鬱陵島東側の島に「海長竹田」「所謂于山島」とある。当時、朝鮮王朝は、鬱陵島の東側の島、現在の竹嶼（韓国名竹島）を「于山島」として

いたことに間違いない。つまり、「于山島」＝独島であるという、韓国側の主張は崩れたこととなる。また先に引用した２月24日の韓国･北東アジア歴史財団の反論のうち、「探査の過程から具体的な観察で描かれたというよりは、伝えて聞いた話をもとに描いたと推定される」という反論も、この史料により否定されたこととなる。

２点目は、中峯（聖人峰）に登ったところ、鬱陵島の東南東に300余里に島が見えたこと、その大きさは鬱陵島の３分の１未満であるとしていることである。宋炳基氏は、張漢相が確認した島は、東南東に位置することなどから、独島であるとしている。あわせて、独島の面積は、鬱陵島の約391分の１で、相当の差異があると指摘している。さらに鬱陵島と独島の距離は約230里（約92㎞）で、張漢相は300余里（約120㎞）としたことから、60余里の誤差を示しているとしている。しかし目測によることであるので、この程度の誤差はやむを得ないこととしている（内藤訳、1999）。

また朴炳渉氏はこの部分を以下のように解釈している（朴炳渉、2005）。張漢相は辰（東南東）の島までの距離は300余（朝鮮）里、120㎞としたが、鬱陵島と竹島＝独島間の実際の距離は92㎞である。ちなみに島根県伺書では40里、160㎞とされた。当時の水準で「鬱陵島事績」の距離感はむしろ当っているほうだった。一方、島の大きさは鬱陵島の３分の１未満と書かれているが、実際は300分の１なので、張漢相は竹島＝独島をかなり大きく見ていたことになる。島の大きさは違っても、東南東の方向というと竹島＝独島しかないので「鬱陵島事績」に記された島が竹島＝独島であることはまちがいないとしている。

上記の解釈についてであるが、まず鬱陵島と独島との間の距離についてみてみると、日本側の絵図で、竹島（現在の鬱陵島）、松島（現在の竹島）について詳細に描いた絵図は、元禄および享保期に鳥取藩により作製された竹島・松島関係の絵図（鳥取県立博物館所蔵）が該当する。これらの絵図のうち元禄年間の作製絵図は、明治10年（1877）の太政官決定の文書（公文録）に写しが収録されている（「磯竹島略図」）。一連の絵図では、両島の距離はたいてい40里と描かれている。これは海里であり、約72㎞である。むしろ日本側の絵図の方が実際の距離（約92㎞）と近いといえる。

次に、島の大きさについてであるが、日本側では、鳥取藩が作製した竹島･松島関係の絵図をはじめ、松島だけの絵図が確認されている。特に「松嶋絵図」は江戸時代前期に松島で経済活動を行っていた村川家所持のものとされ、現在の韓国作製の海図と比較しても、ほぼ正確に松島を描いていることから、現在の竹島の形状をほぼ正確に把握していたといえる。

一方、韓国側では、この史料によって、鬱陵島の東南東約120㎞に島の存在は確認していたことが分かるが、鬱陵島の山（聖人峰）からみただけで、島の大きさを正しく把握していなかった。またその後の史料、絵図でもこの島には名前が付けられなかった。つまり、独島と推定される島を、17世紀末期に調査によって確認したものの、実際に朝鮮王朝から派遣された役人はその島まで到達していなかったのである。したがって正確な島の大きさや距離を知るよしもなかったのである。塚本孝氏のご教示によれば、国際法の要件として、過去の国際司法裁判所での判例などから、当時政府が実効支配していたこと、特に徴税権などを政府が行使していたことが重要であるとのことである。韓国側は、張漢相により独島を確認していたことを強調しているが、実際には、朝鮮王朝は独島を実効支配していなかったことが分かる。

②『朝鮮王朝実録』（高宗実録）の解釈について

1882年、朝鮮王朝により鬱陵島検察使として李奎遠が鬱陵島へ派遣され、鬱陵島の調査を命じられた。調査では絵図（『鬱陵島外図』、『鬱陵島内図』）を作製し、鬱陵島の地形、付属の島・岩、浦などを詳細に記録した。調査後の絵図、記録（『鬱陵島検察使日記』）については、すでに下條座長（2005）により

まとめられている。『朝鮮王朝実録』（高宗実録）をみると、李奎遠の調査前の朝鮮王朝の鬱陵島に関する地理的認識が分かる。高宗実録では、鬱陵島の調査前に、調査内容について、高宗と李奎遠とのやりとりを記している。

文献から以下の点が読み取れる。①高宗は、『東国輿地勝覧』（1481年）などから、鬱陵島のそばに、松竹島と芋山島（于山島）、もしくは松島、竹島、芋山島（于山島）があると認識していたこと。そしてその属島の距離や産物を調査し、また人を居住させる村を作るかもしれないので、詳細な地図と記録を作成するように李奎遠へ命じたこと。②李奎遠は、前任の検察使の調査から、芋山島（于山島）は鬱陵島のことであり、芋山（于山）とはその国の昔の首都の名前であること、松竹島は鬱陵島から30里（約12㎞）ほど東にある小さな島で、産物は檀香と簡竹であると認識していたこと。その島は松島とも竹島ともよばれ、松島と竹島という別々の島があったわけでないとしていたこと。である。

つまり、高宗と李奎遠の鬱陵島周辺に対する地理的認識は、高宗は『東国輿地勝覧』（1481年）や『東国文献備考』（1770年）などの記載を通して認識していたのに対して、李奎遠は過去の検察使の現地調査から、実際の鬱陵島の地理的状況を聞き、現実的な認識をもっていたことが分かる。そうした意味で両者の大きな違いが読み取れる。李奎遠の地理的認識は、『欝陵島図形』をはじめとした、絵図とも符合する。すなわち、朝鮮王朝時代に作製された新羅時代の朝鮮全図には、鬱陵島のところに于山島と記していた。また17世紀後期までの朝鮮全図では、于山島の位置が混乱していたものの、17世紀末期以降鬱陵島の詳細な地図が作製されてからは、于山島は鬱陵島の東に位置する島（竹嶼）にあてられ、その島には海長竹（女竹）が生えており、『鬱陵島外図』では、この島は竹島（ちくとう）と記された。さらに、『東国文献備考』（1770年）には、現存しない『輿地志』を引用して「于山島は倭の所謂松島なり」としているが、17世紀末期以降には検察使の調査の結果、于山島は現在の竹嶼（韓国名竹島）であり、また松島であると認識していたのである。

以上の検討から、19世紀後期においても、朝鮮王朝は、于山島＝独島と認識していなかったことが読み取れる。鬱陵島の東に位置する小さな島で、竹が産出される島とは、松竹島＝竹嶼（韓国名竹島）ということになる。つまり、朝鮮王朝は独島をこの時代地理的に認識していなかったことが分かる。

調査後の成果も同様のことが読み取れる。鬱陵島の調査後、李奎遠は「松竹于山などの島を現地仮住の同胞たちは、みな近傍の小島をこれに当てている。しかるに根拠となる地図もなく、また案内の指標もない。晴れた日に高いところに登って遠くを眺めると千里を窺うことができたが、ひとかけらの石も一握りの土もなかった。すなわち鬱陵を于山と称するのは、済州を耽羅と称するごとくである。」と報告しているが、下條座長がすでに指摘しているように（下條、2005、p.91）、松竹島や于山島は、調査により作製された「鬱陵島外図」に描かれた、鬱陵島周辺のいずれかの島であると言える。地図には現在の独島は描かれていないのである。

下條座長の指摘に対して、半月城氏は「于山島＝鬱陵島と信じこんで鬱陵島に来た李奎遠は、松竹島、于山島は鬱陵島近傍の小島であるという住民の話を聞いて、鬱陵島、松竹島以外に于山島が存在することを住民の伝聞という形で確認しました。王の３島認識は島に住む住民の証言で裏づけられたことになります」[13]と指摘している。于山島は鬱陵島ではなく、于山島の存在を名前だけでも確認したとしているが、それをもってしても、于山島が独島であることを証明したことにはならない。于山島は鬱陵島近傍の小島であると聞いたにもかかわらず、李奎遠の作製した『鬱陵島外図』には描かれていない。各種の鬱陵島の絵図に、于山島は鬱陵島の近くにある現在の竹嶼（韓国名竹島）であるとするのは、住民からの伝聞、于山島は鬱陵島近傍の小島の名称である、という記述とも符合する。つまり、朝鮮王朝では、たえず于山島の位置が確定せず、地理的認識が揺れていたということを示している。このように、上記

文献は、19世紀の朝鮮王朝の鬱陵島、于山島の地理的認識を示す（つまり、于山島は独島ではない）重要な文献であると指摘できる。

5）おわりに

以上の分析から明らかとなったのは以下の点である。

①『東国輿地勝覧』をもとに作製された『東輿備攷』で、鬱陵島の別名である武陵島が、鬱陵島の西側に描かれ、一名を于山島としていることから、17世紀末期に朝鮮王朝から調査のため鬱陵島へ派遣されるまでは、朝鮮半島の東側に于山島と鬱陵島の二島を認識していたというよりは、鬱陵島、武陵島、于山島を混乱して認識しており、これらの島々は現在の鬱陵島のことを指していた。②鬱陵島の詳細な絵図、地図が作製されたのは、日朝間での鬱陵島の領有権問題が発生した後である。絵図は、朝鮮王朝から派遣された役人が鬱陵島を実際に調査して作製している。③絵図は現在の地形図と対応した結果、河川、集落跡など実際の景観と対応し、当時としては精度の高い絵図が作製された。④朝鮮王朝後期に作製された各種地図帳に鬱陵島の絵図が収録されている。各種地図帳に収録された鬱陵島の絵図は、朝鮮王朝が作製した絵図をもとに作製された。また記載内容の違いから、地図帳に収録された絵図はその後の調査に基づき作製された。⑤18世紀後期には朝鮮王朝の命令により方眼式地図である『朝鮮地図』が作製され、鬱陵島の地形はより詳細に描かれるようになった。⑥従来韓国の地図史で重要とされてきた金正浩の『大東輿地図』では、鬱陵島は従来の地図をもとに簡略化して描かれている。⑦これらの地図には「所謂于山島」として、鬱陵島の東側に「于山島」を描いているが、これは距離から現在の独島ではなく、現在の竹嶼（韓国名竹島）である。⑧19世紀後期には再び朝鮮王朝により役人が派遣され、鬱陵島の絵図が作製されるが、鬱陵島周辺の竹島(竹嶼)、観音島をはじめ、島や岩を詳細に描いているものの、現在の独島は描いておらず、調査もしていない。⑨20世紀に入っても、地誌には独島を記さず、「于山島」の名称が記され、地図にも記されていないことから、「于山島」について地理的な混乱がみられた。⑩1694年朝鮮王朝より鬱陵島へ派遣された張漢相の『蔚陵島事蹟』によれば、聖人峰から現在の独島を確認しているものの、実際に島へは到達しておらず、朝鮮王朝は独島を実効支配していなかった。⑪1882年、朝鮮王朝により鬱陵島検察使として鬱陵島へ派遣され李奎遠も現在の独島に到達しておらず、于山島は鬱陵島の近傍の島であるとし、于山島は独島としていないことが分かる。

このように、韓国側が現在の独島であると主張する「于山島」は、一つの解釈だけではなく、相当揺れがみられることが分かった。韓国側は史料を都合よく引用し、于山島＝松島＝独島と解釈している。またその解釈を、他の文献を読む際にもそのまま使用している傾向が多々みられる。さらに従来の竹島研究では、特に韓国側で朝鮮王朝が作成した史料を無批判に使用している傾向がみられる。今後、「朝鮮王朝実録」の文献調査と史料批判が必要であると思われる。文献史料と絵図史料との対応関係も今後さらに調べていく必要があるといえる。

韓国の古地図研究は、最近活発となってきた（楊普景・渋谷鎮明2003、楊普景2003など）。残念ながら竹島研究では、特に韓国側において、従来の地図史や地理学の研究をふまえない見解が多々みられる。朝鮮地図については、韓国国内は当然として、日本国内にも多数所蔵がみられることから、今後も悉皆的な調査、分析を続けていく必要がある。さらに多数写本の存在する『青邱図』、『東輿図』、『大東輿地図』などについては、絵図の系統を調べていく必要があろう。こうした点については今後の課題としたい。

【註】

1）Gerry Bevers 氏のホームページ（ブログ）のアドレスは以下の通りである。

http://www.occidetalism.org（英語・日本語）

なお、氏のホームページについては、国立国会図書館の塚本孝氏よりご教示頂いた。

2）個人のホームページのアドレスは以下の通りである。

http://ameblo.jp/nidanosuke/entry-10028317658.html（日本語）

http://dokdo.naezip.net/Dokdo/Dokdo12b.htm（韓国語）

3）ホームページのアドレスは以下の通りである。

http://knupress.com/shop/mall.php?cat＝001000000&query＝view&no＝60&PHPSESSID＝040332b318a91b6c91db0dd4bb0c0009

4）江原道蔚珍縣条に「于山武陵二島、縣の正東海中に在り、二島相去ること遠からず、風日清明なれば、則ち望み見るべし、新羅の時に于山国と称す、一に鬱陵島と云う」とある。

5）韓国の個人のホームページ「ノ・ムヒョンのために再び勧める独島の歴史」（2007年1月9日）による。アドレスは以下の通り。

http://news.nate.com/Service/natenews/ShellView.asp?LinkID＝1&ArticleID＝2007010911210533175

6）韓国25,000分の1地形図「鬱陵」には、三仙岩と観音島の間の海岸にある集落を「船倉」としている。また『輿地図』、『海東地図』、『廣輿図』、『地乗』所収の「欝陵島図」には、「所謂于山島」の北側に「倭船倉可居」とあることから、「船倉」に比定される可能性もある。今後の課題としたい。

7）絵図に描かれる河川の長さ、源流の位置などから、南陽に注ぐ、南西川、南陽川の可能性もあるが、詳細は今後の課題としたい。

8）筑波大学附属図書館ホームページ「科学研究費補助金成果物　平成16年度-1　古地図（古絵図）」を閲覧した。

9）前掲2）ホームページ http://ameblo.jp/nidanosuke/entry-10028317658.html による。

10）ノーカットニュース 2007-02-24 CBS 文化部情報報告「あっけない日本メディアの独島関連古地図報道」による。アドレスは以下の通り。

http://news.naver.com/news/read.php?mode＝LSD&office_id＝079&article_id＝0000139845

11）大邱日報「日本マスコミ：独島領有権覆す古地図発見、独島博物館長：竹嶼のみ」（2007-03-19 20：09：48）による。アドレスは以下の通り。

http://idaegu.com/index_sub.html?load＝su&bcode＝AIAA&no＝10584

12）韓国・聯合ニュース（2007.2.26）「「韓国の古地図」切手発売、白頭山や独島も図案に」

http://japanese.yna.co.kr/service/article_view.asp?News_id＝2007022600120088

13）半月城通信94号（2003年4月）「『高宗実録』と欝陵島検察」

http://www.han.org/a/half-moon/hm094.html

別表１　韓国古地図にみられる于山島と鬱陵島

絵図種類	番号	絵図名	著者	成立年代	所蔵
天下図 world maps	1	混一彊理歴代国郡之図	権近・金士衡・李茂・李薈	1402年	李燦
	2	混一歴代国郡都彊理地図	不明	16世紀中期	ソウル・仁村紀念館
	3	華東古地図	不明	16世紀	ソウル大学校奎章閣
	4	坤輿万国全図	不明	1602年原図 1708年写	ソウル大学校奎章閣
	5	天下都地図	艾儒略	1623年原図 1770年代写	ソウル大学校奎章閣
	6	●天下輿地図	不明	1747年	崇實大学校博物館
	7	天下輿地図	不明	1747年	崇實大学校博物館
	8	天下大揔一覧之地図	不明	18世紀初期	韓国・国立中央図書館
	9	●輿地全図	不明	18世紀末期	崇實大学校博物館
朝鮮全図 道別図 Korea and provincial maps	10	朝鮮八道地図	不明	15世紀後期	韓国・国史編纂委員会
	11	朝鮮全図	不明	16世紀中期	尹炯斗
	12	●朝鮮図（帖『広輿図』）	羅洪先（明人）	16世紀後期	－
	13	●朝鮮八道輿地之図	不明	16世紀後期	李燦
	14	●八道総図（帖『東覧図』）	朝鮮朝官撰	1530年	李燦
	15	●江原道（帖『東覧図』）	朝鮮朝官撰	1530年	－
	16	朝鮮方域之図	不明	1557年頃	韓国・国史編纂委員会
	17	江原道（帖『八道地図』）	不明	17世紀初期	韓国・国立中央図書館
	18	八道総図（帖『朝鮮写古地図帖』）	不明	17世紀前期	個人蔵
	19	●朝鮮八道古今揔覧之図	不明	17世紀後期	尹炯斗
	20	海東八道烽火山岳地図	不明	17世紀後期	高麗大学校図書館
	21	●八道総図（帖『天下総図』）	不明	17世紀末期	尹炯斗
	22	八道総国図（帖『天下図帖』）	不明	17世紀	韓国・国立春川博物館
	23	江原道（帖『天下図帖』）	不明	17世紀	韓国・国立春川博物館
	24	朝鮮八路志図（帖『天下図帖』）	不明	17世紀	韓国・国立春川博物館
	25	●江原道（帖『東覧図』）	不明	17世紀頃	韓国・国立中央図書館
	26	●朝鮮八道古今揔覧図	金壽弘	1673年	崇實大学校博物館
	27	朝鮮八道古今総覧図	金壽弘	1673年	許英桓
	28	江原道東西州郡総図 蔚珍県図（帖『東輿備考』）	不明	1682年頃	釋圓眞
	29	八道総図	不明	1683年	ソウル大学校奎章閣
	30	●朝鮮全図	不明	18世紀初期	尹炯斗
	31	輿図	不明	18世紀前期	嶺南大学校博物館
	32	朝鮮揔図（帖『天下地図』）	不明	18世紀前期	嶺南大学校博物館
	33	八道全図（帖『八道地図』）	不明	18世紀前期	嶺南大学校博物館
	34	江原道（帖『東国地図』）	鄭尚驥	18世紀中期	李燦
	35	東国大全図	鄭尚驥	18世紀中期	韓国・国立中央博物館
	36	八道総図（帖『朝鮮地図竝八道天下地図』）	不明	18世紀中期	韓国・国立中央図書館
	37	東国八道大総図（帖『輿地攷覧図譜』）	不明	18世紀中期	韓国・国立中央図書館
	38	大東揔図（帖『海東地図』）	不明	18世紀中期	ソウル大学校奎章閣
	39	江原道（帖『地乗』）	不明	18世紀中後期	ソウル大学校奎章閣
	40	朝鮮全図	不明	18世紀後期	崇實大学校博物館
	41	朝鮮全図（帖『各道地図』）	不明	18世紀後期	嶺南大学校博物館
	42	●江原道（帖『輿地図』）	不明	18世紀後期	李燦
	43	朝鮮八道地図	不明	18世紀末期	ソウル大学校奎章閣
	44	東国地図	不明	18世紀末期	崇實大学校博物館
	45	我国揔図（帖『輿地図』）	不明	18世紀末期	ソウル大学校奎章閣
	46	朝鮮・日本・琉球国図（帖『輿地図』）	不明	18世紀末期	ソウル大学校奎章閣
	47	江原道（帖『輿地図』）	不明	18世紀末期	ソウル大学校奎章閣
	48	朝鮮全図（帖『海東図』）	不明	18世紀末期	湖巌美術館
	49	関東図（『寰瀛誌』）	魏伯珪	18世紀	韓国・国立民俗博物館
	50	●東国地図	不明	19世紀初期	尹炯斗
	51	朝鮮国八道統合図	不明	19世紀初期	李燦
	52	朝鮮全図	不明	19世紀初期	韓国・国立中央図書館
	53	朝鮮全図	不明	19世紀初期	ソウル大学校奎章閣
	54	●海左全図	不明	19世紀前期	李燦
	55	東国全図（帖『東国地図』）	不明	19世紀前期	湖巌美術館、三星美術館
	56	江原道（帖『東国地図』）	不明	19世紀前期	湖巌美術館、三星美術館
	57	朝鮮全図（帖『海東輿地図』）	不明	19世紀前期	韓国・国立中央図書館
	58	江原道（帖『海東輿地図』）	不明	19世紀前期	韓国・国立中央図書館
	59	●袖珍八道地図	不明	19世紀前期	尹炯斗
	60	●大朝鮮国全図（帖『鰈域地図』）	不明	19世紀後期	尹炯斗
	61	●江原道図（帖『鰈域地図』）	不明	19世紀後期	尹炯斗
	62	東国八道輿地図	不明	1819年	李燦
	63	朝鮮全図	金大建	1846年	フランス・国立中央図書館
	64	●大東輿地全図	金正浩	1860年代	崇實大学校博物館
	65	●大韓全図	学部編輯局	1899年	李燦
	66	●大韓輿地図	学部編輯局	1900年頃	李燦
	67	●江原道図（『大韓地誌』）	玄采	1901年	独島博物館
	68	●大韓全図（『大韓新地志』）	張志淵著、玄聖運作製	1907年	独島博物館
	69	●大韓帝国地図	玄公廉	1908年	尹炯斗、独島博物館
	70	●大韓全図（『最新高等大韓地誌』）	鄭鄭虎琥	1909年	独島博物館
鬱陵島図	71	欝陵島図形	朴錫昌ほか	1711年	ソウル大学校奎章閣
	72	欝陵島（帖『輿地図』）	不明	18世紀中期	ソウル大学校奎章閣
	73	鬱陵島（帖『海東地図』）	不明	18世紀中期(1724-76)	ソウル大学校奎章閣
	74	欝陵島（帖『広輿図』）	不明	18世紀中期(1737-76)	ソウル大学校奎章閣
	75	欝陵島（帖『地乗』）	不明	18世紀中後期	ソウル大学校奎章閣
	76	欝陵島（帖『朝鮮地図』）	不明	1770年	ソウル大学校奎章閣
	77	鬱陵島（『東輿図』）	不明	1795～1800年頃	筑波大学附属図書館
	78	欝陵島（『青邱図』）	金正浩	1834年	韓国・国立中央図書館、奎章閣
	79	欝陵島（『青邱全図』）	金正浩	1834年	天理図書館
	80	欝陵島（『東輿図』）	金正浩	1860年頃	ソウル大学校奎章閣
	81	●欝陵島（『大東輿地図』）	金正浩	1861年	ソウル大学校奎章閣
	82	欝陵島（『大東輿地図』）	金正浩	1861年	国立国会図書館
	83	欝陵島（『青邱要覧』）	金正浩	19世紀後～20世紀初（1863～1907）	ソウル大学校奎章閣
	84	鬱陵島外図	李奎遠	1882年頃	ソウル大学校奎章閣
	85	欝陵島図（『朝鮮輿誌』）	不明	19世紀	国立国会図書館
	86	●欝島（『大韓新地志』慶尚道図）	張志淵	1907年	(独島博物館)

凡例　○：絵図に記載あり　×：絵図に記載なし　●：木版本、銅板本

文献　李燦（1991）：『韓国の古地図』（韓文）、汎友社→図版番号
塚本孝（1980）：竹島関係旧鳥取藩文書および絵図（下）、レファレンス昭和60年５月号→ページ番号
下條正男（2004）：『竹島は日韓どちらのものか』、文藝春秋→ページ番号
金学俊（2004）：『独島/竹島 韓国の論理』、論創社→ページ番号
韓国・国立中央博物館編（2006）：『行ってみたい我が領土、独島』（韓文）、韓国・国立中央博物館→ページ番号
吉田光男（1994）：『大東輿地図』、草風閣
※個人ホームページ　http://ameblo.jp/nidanosuke/entry-10028317658.html（日本語）、http://dokdo.naezip.net/Dokdo/Dokdo12b.htm（韓国語）

出典	于山島	鬱陵島	備考
李燦 5	×	○	龍谷大学本の模写
李燦 1 ・ 2	○	×	
李燦 3 ・ 4	○（西）	○（東）	字が欠けている
李燦18	×	×	
李燦23	×	○	
李燦 6	×	×	木版本
李燦 7	×	×	江原道の東に島の記載あり
李燦 8 ・ 9	○（西）	○（東）	「朝鮮総督府図書館」蔵書印あり
李燦11	×	○	木版本
韓国・国立中央博物館195	○（西）	○（東）	筆写本　旧宗家所蔵、筆写本が国立公文書館にあり（紅葉山文庫旧蔵）
李燦48	○（北）	○（南）	筆写本　鬱陵島を「鬱山島」と記す
李燦挿図2	×	×	木版本
李燦44	×	×	木版彩色本
李燦41	○（西）	○（東）	木版本
韓国・国立中央博物館196	○（西）	○（東）	木版本
李燦40	×	×	
李燦109	×	○	「朝鮮総督府図書館」蔵書印あり
塚本孝102	○（西）	○（東）	「于山」は島ではなく、地名（国名）
李燦50	○（北）	○（南）	木版本
李燦54	○（西）	○（東）	
李燦挿図5	×	○	木版本　天下図は『韓国の古地図』17所収
韓国・国立中央博物館58	○（西）	○（東）	筆写本
韓国・国立中央博物館59	○（南）	○（北）	筆写本
韓国・国立中央博物館60	○（南西）	○（北）	筆写本
李燦挿図16	○（西）	○（東）	木版本
李燦46	○（北）	○（南）	木版本　「鬱陵島方百里」とあり
李燦47	○（北）	○（南）	筆写本　「鬱陵島方百里」とあり
Gerry Bevers 氏 HP	○（南西）	○（北東）	南西の島は「武陵島」、「一云于山」とあり、1998年慶北大學校出版部により出版
李燦49	○（西）	○（東）	
李燦52	×	○	木版本
韓国・国立中央博物館62・63	○（西）	○（東）	筆写本
韓国・国立中央博物館64	○（西）	○（東）	筆写本、于山島は「方山島」とあり
韓国・国立中央博物館65	○（東）	○（西）	筆写本
李燦69	○（北東）	○（西）	于山島は文字のみ
韓国・国立中央博物館61・200	○（東）	○（西）	
李燦128	○（西）	○（東）	
李燦133	×	○	
韓国・国立中央博物館199	○（西）	○（東）	
奎章閣 HP（奎15423）	○（東）	○（西）	筆写本　島名のみ記載
李燦58	○（東）	○（西）	
韓国・国立中央博物館66・67	○（東）	○（西）	筆写本
李燦121	○（南）	○（北）	木版本、于山島は「子山島」とあり
李燦59	○（北東）	○（西）	
李燦61	×	○	
李燦74	○（東）	○（西）	
李燦75	×	○	
李燦80	○（北東）	○（西）	于山島は「杵山島」とあり
李燦94	○（東）	○（西）	
韓国・国立中央博物館74	○（南）	○（北）	
李燦51	○（西南）	○（東北）	木版本　于山島を「于山」と記す　鬱陵島に「名于山国方百里」とあり
李燦53	×	○	
李燦55	○（東）	○（西）	江原道杵城と箕浦の間の海岸に「竹島」あり（現在も杵城の東南にあり）「朝鮮総督府図書館」蔵書印あり
李燦56	○（東）	○（西）	
李燦57	○（東）	○（西）	木版本
李燦86、韓国・国立中央博物館70	○（東）	○（西）	筆写本
李燦90、韓国・国立中央博物館71	○（東）	○（西）	筆写本
李燦101	×	○	
李燦103	○（東）	○（西）	江原道杵城の沖に「竹島」あり
李燦146	○（南）	○（北）	銅板本
李燦147	○（東）	○（西）	銅板本
李燦152	○（東）	○（西）	銅板本
李燦45	×	×	
金学俊53、韓国・国立中央博物館72・73	○（東）	○（西）	フランス語で記載、独島博物館に複製版あり
李燦60	×	○（東）	木版本
李燦155	○（東）	○（西）	銅板本
李燦154	○（東）	○（西）	銅板本
独島博物館での調査	○（東）	○（西）	
独島博物館での調査	×	○	鬱陵島は「鬱島」とあり
李燦156、独島博物館	×	○	銅板本
独島博物館での調査	×	○	鬱陵島は「鬱島」とあり
下條110、奎章閣（奎12166）	○（東）	○（西）	筆写本　「所謂于山島」
奎章閣 HP（古4709-68）	○（東）	○（西）	筆写本　「所謂于山島」
李燦195、韓国・国立中央博198、奎章閣 HP（古大4709-41）	○（東）	○（西）	筆写本　「所謂于山島」　「京城帝国大学図書」蔵書印あり
奎章閣 HP（古4790-58）	○（東）	○（西）	筆写本　「所謂于山島」
奎章閣 HP（奎15423）	○（東）	○（西）	筆写本　「所謂于山島」
韓国・国立中央博202、奎章閣 HP（奎16030）	○（東）	○（西）	筆写本　「于山」
筑波大学附属図書館 HP（東輿図11）	○（東）	○（西）	「于山」
韓国・国立中央博205、奎章閣 HP（古4709-21）	○（東）	○（西）	筆写本　「于山」
朝鮮学報124・125輯(1987年)	○（東）	○（西）	筆写本　「于山」
李燦140、奎章閣 HP（奎10340）	×	○	筆写本　「朝鮮総督府図書」蔵書印あり
李燦135、吉田、奎章閣 HP（奎10333）	×	○	木版本　「朝鮮総督府図書」蔵書印あり
塚本孝101	○（東）	○（西）	筆写本
奎章閣 HP（古4709-21A）	○（東）	○（西）	筆写本　「于山」
李燦227	×	○	
塚本孝103	○（東）	○（西）	「所謂于山島」
個人ホームページ＊	△（東）	○（西）	鬱陵島の東に「竹」（＝竹嶼）とあり、本文には于山島が島の東南にあるとする